



特 10

4978

639

龍宮開化
視機械

菊廼舎編

091899-000-3

特10-639

龍宮開化視機関

菊廼舎 東籬 / 著

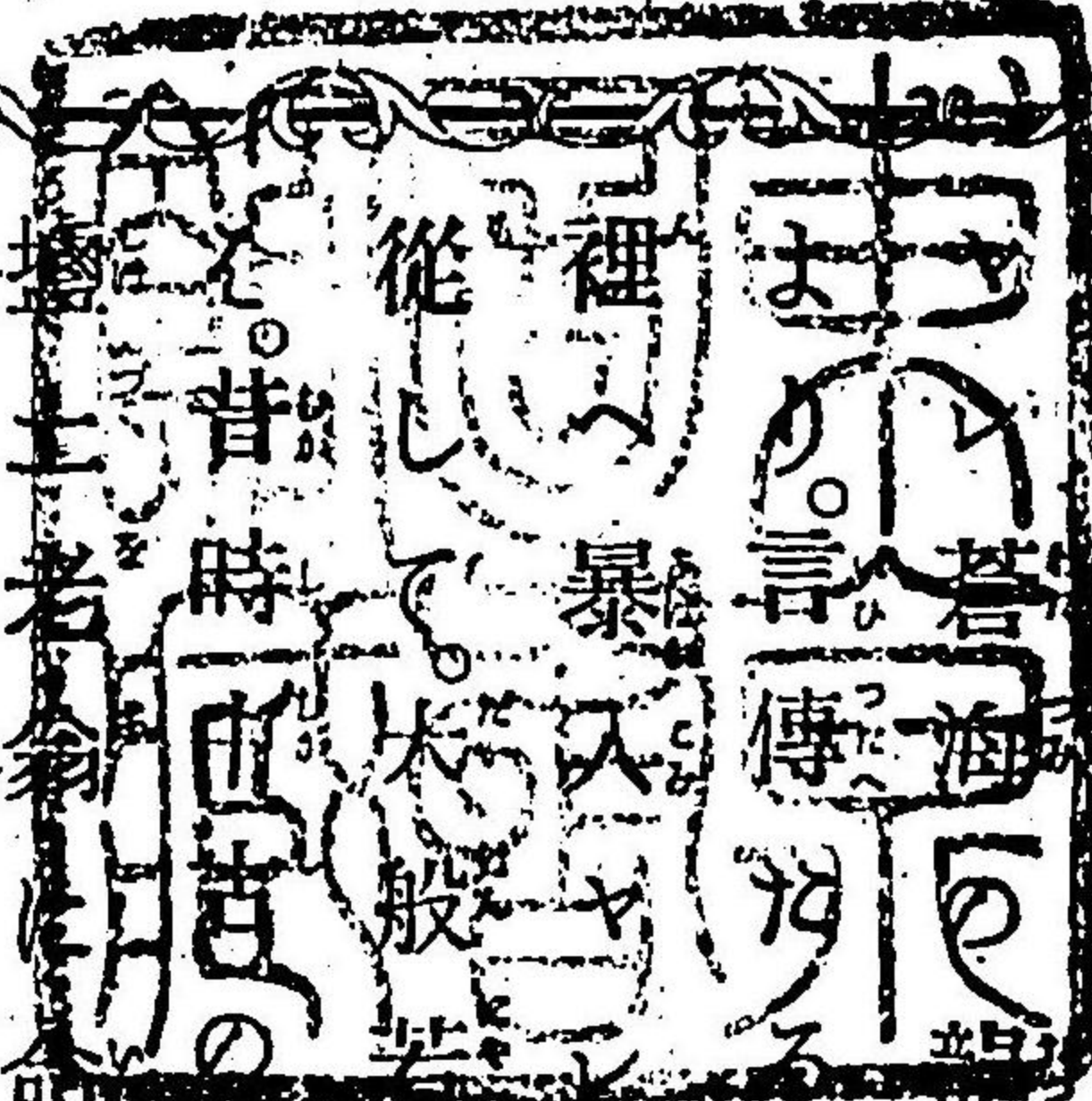
M22

DBO-0436



No. 1686/22

機關緒言



宮城の其譚談。唐土も倭國も太古
 其中に。水簾洞の孫悟空。龍王宮
 黄金の棒を奪取。三藏渡天の隨
 を取得たり。ヤレ夫に引換吾朝
 太古神代。火々出見尊と言せふ。
 令て。無目籠を製造しめ。龍宮城
 へと行玉ひ豊玉姫を娶れて。満洞瓊を得玉ひ
 ぬ。ヤレ又浦島の好男子。ソレ乙姫君に一寸戀慕
 られ。玉掌函を贈れて。戀しや故郷と立歸り。貫



一函をは開て見りや。ユリヤ又驚愕白髮老翁に
 なられけり。ヤレ偕又藤太秀郷の怯ひ百足を退
 治して七種の寶器を貰る。斯る例も有るれ。ヤ
 ンレ作者が胸の機關に龍宮開化を編出。兒童
 君等に視せて。ヤレ眼鏡の曇ぬ教訓種樂屋で勸
 善の糸を導。十回までお眼止ら。先君お代り御
 最負御評判を願ます

筆胸機關家の老人
 菊廼舍東籬述

目録

| | | |
|-----|----------|---------------|
| 第一回 | 舞踏會の蛭子段 | 海嶮八龍館に鯛子を関る |
| 第二回 | の蛭子段 | 鱈謀て方頭魚が意を執る |
| 第三回 | 全客殿段 | 鱈鯛子を海嶮小配偶を望む |
| 第四回 | 全續 | 江鯨方頭魚に婚議を説く |
| 第五回 | 蜷館の小路 | 鱈子烏賊を説て鯛子を養ふ |
| 第六回 | 全續 | 方頭魚鱈子小婚姻を逼る |
| 第七回 | 鯛子の部屋 | 海鯛鯛子に艶書を贈る |
| 第八回 | 車屋の段 | 虎魚虎河豚と密計を謀る |
| 第九回 | 章魚藥師門前の段 | 章魚寺に鱈魚鯛子を救ふ |
| 第十回 | 磯園の段 | 鯉魚鱈魚鱈鮫が喧嘩を和陸す |

(終)

地名神社佛閣館邸稱

龍宮城中八龍館。蛭子宮。蜷小路大海鯉侯邸宅。蛤街料理店屋氣樓
萬代街劇場龜座。磯端鱸別莊。鯖子村鱒鮫住居。黑茶新町車屋住家
磯邊公園地八尾山章魚寺章魚藥師如來。雜魚場地藏尊

人名

大臣龜野公爵。海大鯉侯爵。夫人鯖子。子息伊灘曆神宮司方頭魚伯爵。内室
桐子。子息九郎。嬢鯛子。豪商海鰯三千尋。支配人鱸清吾。大海鯉家從。江鯨
郎。醫師烏賊。平菴娘。やりか。方頭魚下婢。島角力。大關鱸魚武松。鳶大頭取。鯉
魚松魚郎。洲走吉藏。藝妓小撥尾。車屋海老藏。後妻虎魚。車夫虎河豚。毒藏
伊優。鱒五郎。伊佐吉。女形津奈志。名吉。博徒頭。鰻飯。灘右衛門。博徒。雙鯉。鯉丁
吉釵。紫角二郎。虎頭。紫介。齒郎。鋸。紫番作。黃鯉。建造。潛龍。鯉。菊松。章魚寺住職
天蓋僧正

新發明龍宮開化視機關



特10
639

龍宮開化視機關

東京 菊酒舎東籬 著



第一回 (舞踏會の段) 海龍八龍館に鯛子を関る

海龍八龍館の鯛子も高き海龍三千尋(魚名)と稱号し豪商と巨萬の財
 産を世襲し國立銀行を設立し其他鐵道の株式の言に及む津々浦々
 此會社を稱して海龍海龍の別名社と稱号し鐵艦數
 艘を建造して海外諸國に貿易し何不足なき身の上ながら父母は速く
 世を去りて未だ冠
 家勢を盛て居んと支配人顧問の隨一鱸清吾(魚名)は心を尽し其人物を
 擧げるが兎角三千尋か意に適たる者もなく未だ時節早しとて商業に
 のみ意を委ね最温順なる生質なれども折々の朋友の親睦とて遊園妓
 樓にを臨むものから青年の事なれは萬一放蕩に流てい由々數家の大事

なりと清吾の意を腦せけるが當時美人の聞數多ある中に最も世評の高かりしは姪子宮の神官なる方頭魚神宮司(魚名)の嬢鯛子(魚名)今年二八の春を迎へ衣通小町が容色ありて其上清嬢紫姫か志操を具へ讀書人木道の言も更なり倭歌絲竹の道ふも暗からず其名雲の上までも聞へ貴族縉紳争て縁を需媒介を以て言倚さも方頭魚が意にへ更衣典侍にも備へき望あればや何方より言込ても只程能言断孰れも望を失かし清吾と竊に聞出し其人柄の慕しく或時三千尋小言やうの清一大旦那が卒去以來私及はずなから總理してお家を支配致して居れど追々私も老年にて殊に近來は多病にありお家の補佐も覺束なく旦那も早廿五歳に成なされぬ最似合しき御縁を需て安心して隠居を願度と夫の願て居ます幸ひ云ふの事を聞出ました勿論私も余所なから一寸其婦人を窺ましたたが當時二個とある櫻致丁度來る某日の八龍館で舞踏會がござります私もて供を致したから旦那も往て御覽じませ

観 欄 開

若御意に適ましたる表向に媒介を入れて御縁談を取結ませふ伊那の神宮司の舊其家柄殿上人にて今に於ても位尊く容易く縁組を許ぬよし然れ當家も商人ながら數代續し名家にして恐く此都會に於て肩を並る者をあらず又方頭魚の貴族なれども甚た財産に乏き趣なり彼が意を執らん事の私が方寸にございますれハ先試に御覽じませと薦ふ三千尋の太く歎ひ其日を待て花聲ふ装ひ清吾を従て出けるが名に負ふ都第一の八龍館の事なれぬ貴族縉紳優等の進士各夫人令嬢を携へ肩磨雜沓言ばかりなく幾百人となく高樓に集會て夫々の群に宴を開き交々舞踏して戯ける彼方頭魚の嬢鯛子も豫て此席に在けるが人々の薦に止を得ず俱に舞踏の群に入まが有樂深窓に養育たる嬢なれぬ人に蒸されて逆上たりけん頻に心地煩しく其席小堪がたければ若穢しき振舞せは衆の客に無禮なり且物笑ともなりなると透を窺ひ其群を脱出只壹個慰所ふ到らんと其室を立出るを三千尋の先刻より衆の人

欄 開

四

の後邊に在て清吾か夫と知するも初て其婦人を熟視に實に輝媚たる花の顔玲瓏たる璧の膚滿座粧装たる美人の中に獨耕を抽るの恰も秋津洲に在とか聞く士峯の高嶺の雪の肌亭々たる形容なれの胸もせを視居たるが今鯛子が室を出るを見て何處に行やと吾にをあらて其後邊を暮行に鯛子の暫時歩を進て人待顔に四邊を視屈曲たる高欄に身を倚せ遙けき海上を眺望め涼風に面を吹せ片掌に鳩尾の邊を押へ片掌に懷中を探ツ、不審顔に小頸を傾け彼方此方を顧視て物落たる氣合なれば利發たる三千尋の速くも其容を推量して三卒爾あかど貴嬢の何かお落なざれましたかと言に鯛子の會釋して鯛「ハイ余り大勢の人に酔まして氣分が悪くなりましたから藥を飲よふと存ますか舞踏の時落まじとか懷中致した藥入が何も見へませんのでト言に三千尋は氣の毒顔ふ三「夫の困でござりませふ寔失禮ながら私か持合ました藥が有ます夫を急遽に進上ませふと下服の隠より日本船來と見

眼

喉

五

で黒塗ふ四邊まげゆき金時繪の藥入を提出三「此中に入て有のハ當時日本で製ます薄荷水でございまま之を少し食上たら頓て癒さされませふト藥入を鯛子が掌に渡せば鯛「寔に御深切に有難存ます左様な少し戴ませふト押戴て捻止を拔藥を少し掌に移せば得ならぬ香氣四丁に薫を直に服用一尙額の邊に塗りなごするに妙藥の奇特著しく忽地胸の悪を忘れ神心清々となごければ爾も欣然き面色にて鯛「寔に宜いお藥を頂戴まして大きに氣分が癒ましたト初て三千尋か面を視れり何れの貴顯紳士にや容貌寛裕溫柔に猛からせして且茂く萬事廣揚の取捌に不覺春情發動して微と吹來想風ふ風誘瓦斯の燈火に照添ふ面を背て居たりける其時三千尋曰るやう三「其藥は日本の植物から製た物で本邦ふは嘗て無品至極利目のある藥夫は其儘お持なすつてお席ふ被爲入たら少しッ、時々に用なされを再回わくくする事の有ますまいト旨時舞踏終たりけん俄然に衆人室を出露を此方へ

機

来ければ若き男女の當面て人の思ひくも何とやら場合思しと三千尋
 の衝と別て行過れば鯛子へ再回言よしなく終に人に隔られ詮方なけ
 れは薬入を其儘確と懐中に収め舊の席に立戻り慈父方頭魚に有し事
 を云々と物語り彼地此地其人を探索るふ早速く歸行たゞけん終に影
 だに見事なく又何處の誰とも名を聞されは殆々困じ果けるが衆客追
 追開散をれば方頭魚父子も是非なくして一先家に歸らんと俱に楷段
 を下りける是を鯛子三千尋が赤繩奇縁の緒口ふして彼薬入は正に是
 月下氷人の媒介か或ハ又艱難憂慮の毒藥か神ならぬ身の知るよしな
 し方頭魚父子は席を辭て既に楷段を下りけるに彼方の大廊下の方よ
 りして一群の貴族來れるあり是誰なるん其人は當時龍宮内閣の權者
 大海鯉(魚名以下同)候爵夫人鱒子令息威灘磨を携へつゝ、属官の甲乙家
 從江鯨郎陪從へり夫と見るより方頭魚神宮司の帽を脱して進み近
 づき懇懇に頓首て方「是ハ」大海鯉閣下御簾中令息にも揃せら

観 機 關

れての涉臨場を席を異に仕れば一向涉來館を存せずして涉機嫌も伺
 ハを失敬の段平に「宥怒を希ふハイ」仰の如く愚嬾てござりませ
 是れ鯛よ涉挨拶言せ何がさて一向世間知らその不調法者涉見知置か
 れ宜う願ます涉令息にも近來日本より涉歸朝の儀ハ承りましたが何
 角社務に取紛未たお歡びにも参館致さす兩三年拜顔を得ぬうち見違
 ふ斗りの涉肥滿儘の間に種々の涉研究是ハ「立派な事實に忍入
 ました倅九郎などは歳こそ貴君と涉同年なれども至極の愚鈍者只碌
 碌として實に慙愧千萬併大人の御教諭を蒙難有存まそ此上共何卒宜
 うお推奉を願ますト追從采々喋々すれと大海鯉候も會釋して「大方
 頭君ハ毎もお壯健では息女にハ兼て涉障ハ承知致さがお目に懸ハ初
 てマヤが實ハ窃窺な能いお嬢シャノウ奥を羨しい事シャちと遊びに
 お越なされ時に方頭魚君能い所でお目に懸た一寸お斷が有と少し應
 下の欄干の方へ寄れハ神宮司ハ「ト小腰を屈めて進み近づ

観 機 關

大海鯉侯の小音になり大「豫てお依頼の御子息の件シヤが外ならぬ貴所のお依頼シヤに依て自分も種々と心配致したか何か望通に行さふシヤ選のらす善いた咽が有らふア安心のため一寸お耳打をまて置が幸ひ悴も歸朝しましたか御互に談合て勉強が出来ます方「ハイ」段々傍懇切難有存ます孰れとも宜う傍致論を願ますハイ愚老も只今歸宅の心算で夫まで傍供致しませうと打連て玄關まで送出席爵ハ二正立の馬車に乗移れ方頭魚父子の車夫を招て頼て私宅に歸ける

◎第二回（蛭子宮の段）鯉謀て方頭魚が意を執る

去程小海船三千尋ハ八龍館より歸宅して直ちに鯉清吾を招き今日云々の事により鯛子に薬入を贈りしと一伍一什を物語り三三賢小其方の言通り彼の絶世の美人なり斯る婦女を妻とせば世間に耻る處なし其方宜敷媒介して異なく縁談を調ふべし何分懇むト充分に心意ある



鯉謀て方頭魚が意を執る

横親

八

視

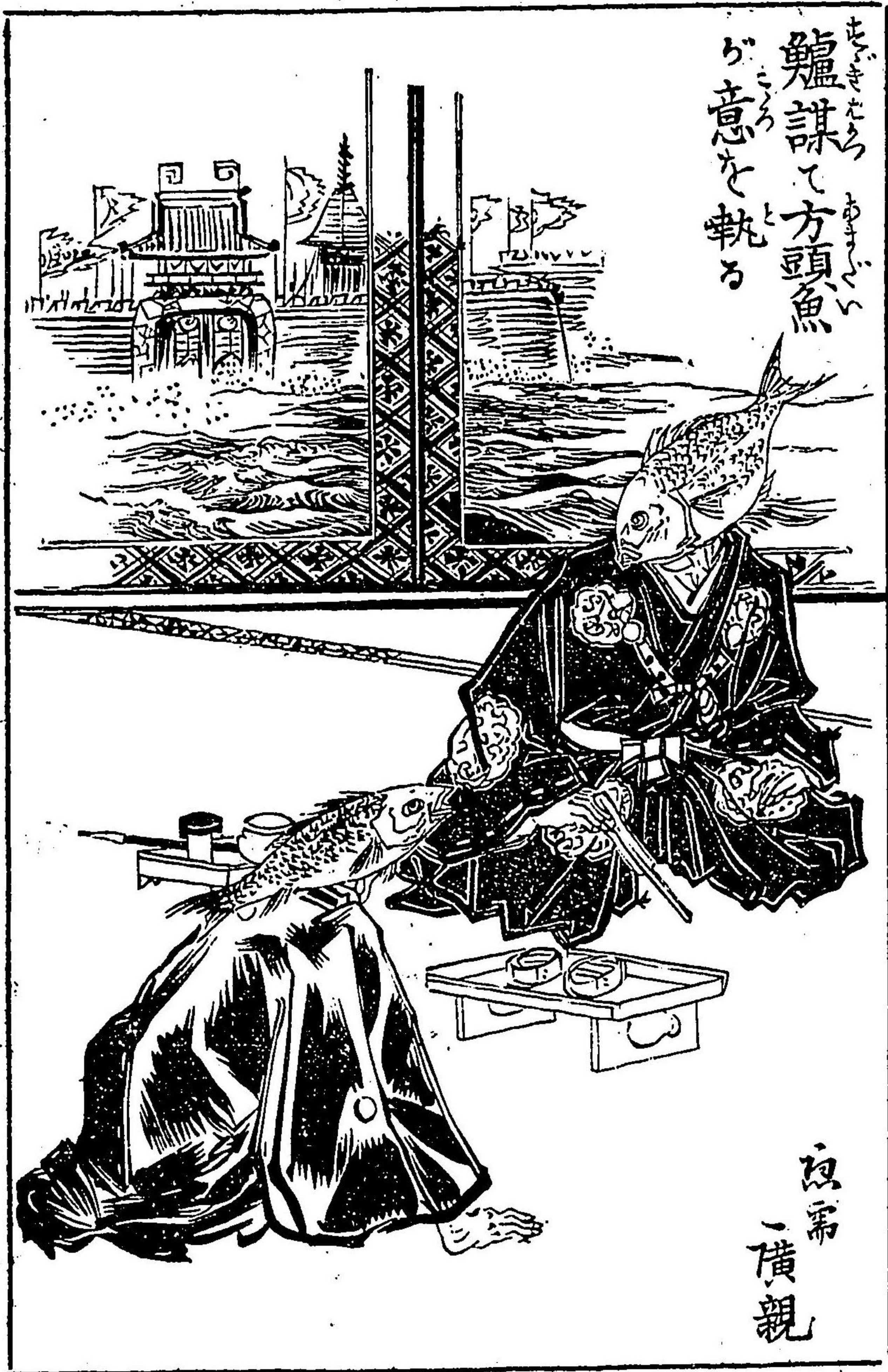
機

關

大海鯉侯ハ小音になり大「豫てお依頼の御子息の件シヤが外ならぬ貴所のお依頼シヤに依て自分も種々と心配致したか何かお望通に行さふシヤ遠のらす善いね咄が有らふア浮安心のため一寸お耳打をまて置が幸ひ悴も歸朝しましたか御互に談合て勉強が出来ます方「ハイ」段々涉懇切難有存ます孰れとも宜う涉教諭を願ますハイ愚老も只今歸宅の心算で夫まで涉供致しませうと打連て交關まで送出席爵ハ二疋立の馬車に乗移れハ方頭魚父子ハ車夫を招て頓て私宅に歸ける

◎第二回（蛭子宮の段）鯉謀て方頭魚が意を執る

去程ハ海輪三千尋ハ八龍館より歸宅して直ちに鯉清吾を招き今日云々の事により鯛子に薬入を贈りしと一伍一什を物語り三「實ハ其方の言通り彼ハ絶世の美人なり斯る婦女を妻とせは世間に耻る處なし其方宜敷媒介して異なく縁談を調ふべし何分懇むト充分に心意ある



鯉謀て方頭魚
が意を執る

一横親

容子なれハ清吾も大き小歎ひて清然らハ伊意に適ましたか併先日も
 言た通り彼神宮司ハ家格宜けれハ更衣典侍に備るか又て皇族にも綴
 組せんと深き望みのある容子當時勝手向は不似意でも腐ても綱貴族
 なれば尋常にてハ調かたし此方も此龍の都に人も知たるお家なれば
 一端縁談を言込て若承引せられれば世上の人の言れ種海鱈は財産の
 あるに任せて貴族に縁組を言入しに商人なりと賤免られ断られしと
 評判請てハ門帳小關係一條なれハ私篤と勘考致し充分方頭魚の意を
 執退引させぬやう斗ひませふ選ては事を仕損ますか氣永に暫くお
 待下さい頓て吉左右言上ませうト其夜は清吾が私宅に歸り傭工夫を
 懲しなるが吃と思ひ着ことありて其趣三千尋に言合免病氣と披露し
 他出を停め夫より準備を調へて蛭子宮へ參詣し神宮司に對面を乞ひ
 清吾は隠忍に額突て清私事と海鱈社長海鱈三千尋か支配人にて鱈清
 吾と言ますが主人三千尋病氣に就兼て當社と信仰の御神なれば私に

代參を命じました何卒病氣平癒の祈禱を願ますと祈禱料に供物料若干を添て差出せば神宮司の委細承諾し方夫は心配を察まふを早速祈禱に取掛り丹精を抽ませふと直ちに神前へ神酒供物を捧げ稍暫く祝言を讀上げ願て御札守を渡しければ清吾の忝と一體して勇勇として歸行ぬ夫より毎日に參詣して一週間毎に別段に神酒料を奉り信心怠なれず神宮司も厚く取扱ひ日増に懇意になるまゝに折ハ拜禮の後四方山の断なきまで歸りけるが或日清吾の神宮司に曰るやう清「當御神の御利益にて主人も大きに快方に赴き遠からず全愈に至ませふ併あかす二ツに貴方サマの御祈禱丹精も懇所にして主人の勿論私初め社中一統の慶び大方ならず彌以全快の上の禮參として主人直に參詣致されませふ就て何かなる社へも祈附言上たいト内々協議中できさりますが萬一御望の品もござら何なりとも仰聞ふれませ私主人へ首聞け御寄進致すやう言ひませふト曰ふ

神宮司の歡ひて方「病氣は快氣トあら重疊受たし是迄毎々下寧の希物有繫ハシ大家お手厚の事で貴所にも老体の御願なく日日の參詣奇特千萬其赤心の神に通じて全快も早かりしなうん當社も存の通宮格ハ宜いが存外に氏子も少く以前と違て社願といふ物も坐らねば御覽の通り宮殿も殊の外大破に及び修復も致たいが何分力及びません氏子を歡進致たところが那の社前に掲て有通り寔に僅の寄進にて夫も一時に納まらる月賦或ハ年賦にて到々容易の事に參らす夫のみ遺憾に存るが若祈附の思召も座座の何程にても苦うかい思召次第造營の御手傳を依頼申たは是々唯ぞ最一ツお茶を上ぬか清「否々最う御構い下さいますな委細只今の御咄ハ承知致ました孰れ主人に首談まして其内御挨拶致ませふ先今日ハ御暇直上ませ方「マア宜いでハナイか然らは何分宜うお依頼直す主僧雨催ひになりませた傘は御持參成れたのな清「ハイ小僧に

蝙蝠を掛けて居ます左様も、清機嫌能毎度、伊介ト社人に挨拶し拜殿を下りて、再回社前の鈴を鳴し、丁々ト拍手を打て三拜して歸り、其後も尙怠らず参詣せしが、凡五六日も経て清吾は神宮司に面會を乞ひ、神宮司の心中に笑を含み、定めて先日の挨拶ならん、孰れも海鰯家の事なれ、上首尾にて百圓位少くも五拾圓は送すまじ、今日茶菓子も毎ものやうに、供物の下りては、愛想なし、蕎麥饅頭かイヤ、家主貞良の方か宜からう、財か利からナニ最う十時過た、今日は毎もより参詣の時刻か遅かつた、咄をして居る内、ふ午砲ふるふ一寸一口出して、跡で湯漬ても出が宜いト、細君に言付て客間に立出清吾に對面し、互に寒暖の口誼終り、方頭魚は三千尋か病氣を尋ぬれ、清吾は少しく席を進み、清一、清隆サマで此程は全く快癒致しまし、近日御禮參も致され、まずが夫に就て先日一寸、咄の一條、篤と主人にも言聞、外支配人共にも協議致ました、が此度の病氣、全快ハ全く當社の、清隆故、禮と

眼 機 關

して當社の、清修復は主人一手、引請言ませ、就ては此方の、清都合次第、諸職人を入ります事、致ませ、ふし且御修復は出来、まして永世維持法が立、ません、なり、故海鰯社中より、年分、是々の金を積立、まして其内、是々の金の、御宮附と致し、又是々の金の、御祈禱、清丹精の、清禮として、貴方サマの、清所有と致しまして、鐵道株券に引替て、差上、す積でござります、左様致して、是より、當社を海鰯家の、祈願所に、清願言、たうござります、ト、聞に、方頭魚の、案外の、幸福にて、驚愕、こと、大方なら、を、何と返答、ん詞もなく、呆然として、居たりしが、是、全く、お護言を、蛭子の、命の、御神徳と、満面に、笑を含み、頻りに、點首、き、方一、是ハ、意外の、清寄附、拙者が、大慶ハ、言までもなく、神慮も、左こそ、清満足に、思召ませ、う、又不肖の、拙者まで、へ、永世の、清扶助、近來、痛入たる、次第、此上ハ、一層、丹精を、抽、では、家運を、祈りませ、ふ、清修復の、儀ハ、明日より、でも、此方に、差支ハ、ござ、る、ぬに、依て、何時、ふても、れ、取掛、下さい、御神体ハ、早速、お假殿へ、れ、移言、す

眼 機 關

す清一左様なと善の急げと言ますから早速明日より着手致させませ
 ぶ左すれの職人共も多人數入込ますれば取締の爲め私共の内にて
 人手代の者壹兩人、日々出張致ますか、何角沙厄介も相成ませふ
 是の余り失禮なから茶其外手數も掛りますから茶料として差
 上ます十金百圓差出せの方「イヤ最う何から何まで行届何卒は主
 人公へ宜うね禮を愚老も年來の志願は蔭で成就致して大慶至極時に
 最う時分でござる粗飯を準備致させました暫時お待下さい決して
 手間の取らせませんと急に座を立勝手に至り莞爾ととして細君桐
 子(カ、ミ、マイ)ノ別名に向ひ方「是々云々の譯シヤか、先刻の通で
 余と粗飯で出されまは鴨鵝魚屋か海津屋共に鯛属ノ名へ言つけて相
 應の料理を取寄るが宜いナニ飯を炊かけて手が放されぬ志は鯛属ノ
 名が遣られずば宮番の笛吹(鯛属ノ名)でも走らせるか宜い其方も一寸
 支度して逢が宜らふアノ鯛ハ一番支配人シヤゲナ鯛子も斯云時の陰

方がない膳でも拭てた手傳なぞい先足留に其刺身で御神酒の残を先
 へ出して其内ふの來たらうと頻りに世話をやき物の鯛の一家の幸福
 に難有と、持玉ふ神のお顔に類似て家内莞爾ととどりはや一持出す
 膳部酒肴交々に發應を交際上手の鱈清吾の程能請て其日の歸りぬ
 ◎第三回(全客殿の段) 鱈鯛子を海鱈に配偶を望む
 斯而鱈清吾の其翌日より諸職人を勵一ツ、宮殿修繕を急せければ不
 日して落成に及び従前に増りて壯嚴善美を尽せの方頭魚か悦ひ大方
 ならず則ち吉日を撰て選宮の大祭を執行ひ其日の三千尋を始め海
 社員大勢參詣し奉幣を捧げ海鱈家より料理饗饌の仕出に及び當社の
 氏子を招待して神酒赤飯等を饗應し最賑々しく見にける既小其夜に
 到りての社員の人々坐敷小集會て悦みの酒宴を開き方頭魚一家も同
 席して交々興を添けるが鯛子も母に伴われて其席に臨みける小坐上
 に三千尋の在を見れハ豈國々んや八龍館にて藥を惠まれたる人なれ

忽地に胸轟かれて其禮謝を演んとせしが社員大勢の手前を憚り其
 場は何氣なくもてなしつ、竊小父母に呷きて藥入の主なる事を告る
 に予方頭魚夫婦も太く愕き且悦び折を窺ひ此事を言出さんと思ひけ
 れども其夜の程宜き折を得ねば心ならずも黙止けるが三千尋は酒宴
 半に歸宅して其他の社員も追々小酔を盡して解散しける清吾は尙後
 に残りて夫々の取纏を差圖し手傳助の男女に至るまで手當残る所
 なく計ひけるに早太く夜も更て殊に雨さへ降出ければ老人の歸宅難
 義なると方頭魚夫婦が切に止めて其夜は其儘一宿しける然るに其
 翌朝未だ味莫に大海鯉侯よ使來りて狀箱を差出せし神宮司急ぎ披
 開るに子息九郎殿件に付き御談あり至急御來車下されたりし方一御職
 務上御多忙にて貴所の御出向成され難くば内室にても不苦早々御出
 有たしと認めあれば方頭魚の心中にうち點頭き方「コレ」桐子一
 ずれ出今大海鯉から書簡が來たが九郎の事で至急に會度との事勿論

職務上多忙みらば其方で宜と有が多分豫ての心願が成就しとのシヤ
 らう一ツ吉事があるど何事も斯云ふものシヤ併昨日遷宮を仕た計て
 種々御宮の用もある夫に儘か泊て居るから那人も是まで非常の骨折
 で首尾能く御修復も調ふた事故他に計算上の誤もあるし今朝の残物
 で一献出して緩々話度と思ふ處どふも己が居ずば場合が悪い大義な
 が一寸往て來てお呉何髪ハ夫で宜し其趣を返翰するか其積で
 早く支度をなさば桐「左様なら一寸手水でも遣て参りませうコレ島
 や車やへ速く往て來ナト内室は準備を忍々小調へ急ぎ朝飯を喫して
 出行ける兎角する中清吾も起出れば豫て準備の酒肴を出し先一盃と
 初けるに清「先も早ございます今朝は存外快晴致ましと偕昨日の大
 勢種々御厄介無諸君御疲勞で被爲入ませうイヤ是は早朝か恐入ま
 したナ方「イヤモウ昨日は段々御骨折御蔭で万事滞なく相濟大慶致
 ました貴所に万端御配慮で嘸御疲勞でムつたらう昨日の何角取紛

れて染々御禮も言サなんだで今朝は御互に腹直かた〜御齋の礎て
 一献呈度ござるが御懇意に任せてはんの内輪で鯛子ソレお酌をセイ
 清「コレは嬢君のれ酌忍入ますナ昨夜ハ嘸御迷惑で被爲入まじとろ
 ふ鯛「大層面白うござりました清「イヤ當時の若輩ハ中々藝がござ
 います時ハ今朝程は未だ奥君に目通致しませんか鯛「ハイ母は今
 朝程據あ〜方「イヤ妻は甚だ失禮じやが大海鯉侯より來翰で拙者が
 代理に遣しました貴所へ宜う言て呉いと清「左様でござりまするか大
 騒お早いハ出懸併私が朝寐を致したのでござりまする方「イヤ左様で
 ハござるぬ早天に出懸ました諸昨夜から能折があつたら言さふと存
 宏たが寔に不思議な事で先頃八龍館へ參た節是なる嬢が急に氣分が
 勝れんので來館の人を憚り拙者にも言さす竊に藥を飲たいと存た處
 が生憎失念致したので甚だ困却致したそふたが其時何方か藥を下さ
 るとて藥籠をお貸し下され其儘席に戻られたと言ふに因て來客中を

観 機 關

観 機 關

探しましたが一向に見がなく終ふ夫ありお致して甚ぶ心ならず打過
 ましたが昨夜嬢が言に其方ハ三千尋君で在たるふナ早速お禮を言
 したかつたが御社員中を憚り何とも言サなんだが何れ藥籠ハ此方よ
 り返上しますすが何が御主人へ厚く御禮をお懸と言す實に不思議も
 ので今又斯様に御入懇になるも深い御縁でござるうコレ鯛子些
 お銚子が暖ひ改めてお出鯛子ハハイと銚子を携へ坐を立て退きける
 清「へイ左様ござりましたか委細主人に言聞せませうが何其様に
 御義理堅い事ハ及ません時に不思議な御縁と言せハ余り指付がま
 しく忍入ますすが主人も最早青年になられますれば何卒相應の配偶
 をト存まして夫のみ私が願ひをございますすが些御家格ハ違ひますか
 如何でございませぬ御家の嬢君を御縁組ハ成ますまいの實ハ速か
 ら此事を言上度と存しましたが寔に折を得ませんので相成べくは御
 相談を願ひ度ござりますナと云時鯛子は何心なく襖の蔭まで來りし

が既に座に入るとして風と此隙を聞き心中大に喜悅つ、思はず面を赤らめて有繋に衝とも進みかね父が挨拶如何ならんと襖に添て窺居ける其時方頭魚の莞爾として方「是はく、意外の御咄勿論是まで一回縁談も言込れましたが實は少々此方にも合があるので何方へも相談致しません段々御親切に成下さる海鯛君の事なり殊に累代の御家柄に在れば至極望まじき儀ではござるが何分是まで万端心に任せんので充分の賤も致さず且の準備等も万事届きませんので清「夫と當節柄執様でも左様で被爲入まそが其邊等の所は甚失禮をがら如何様とも私が執計ひませお何卒御縁邊になりませやう平に願ひ度ございます方「段々御懇切添うござる拙者に於ては別に異存もござらぬが今日は妻と留守の事又縁談とかりは親の存寄ばかりも参らぬもので篤と相談の上孰れ御挨拶致すでござらふと盲時鯛子の銚子を持來れば清吾は何分宜くと夫より四方山の咄に移り清吾と心中に想

ふやう今鯛子が親の御まで來りて立聞たる容子何となく歡し氣にて必有素態なれば老練の清吾は早くも見て取り多分此縁の成就すべしと其身も侶に心嬉しく思はず盃を重ねければ清「イヤ最計はず大頂戴致ました殊に朝の別段に回りが宜しく斯の通り海老のやうになりました勝手がまじうございます御飯を願ひ度ござります鯛「マア宜しうございます最うに一盃食上りましナ、鯛子も心中には是を月下氷人かと頻ふ清吾を饗應ける清吾も再三盃を辞すれば方「夫で余り御無理に言すも如何じや御飯を上るがよい拙者も御一所に御相伴を致さうと侶に朝飯を喫し終り再回茶菓など出しけるが清甚た頂戴立で恐入ますが今日の些主用もござりますれば先御暇言上ませふ何分先刻の儀は宜しう願ひます與君へも宜しう最御構下さいますな方「左様かな夫で段々御苦勞添うござつた三千尋君始め御一統へ宜うと互に挨拶して清吾の歸りける漸其日も午時過頃内室桐子の歸

り來り桐「只今戻りました彼家でも宜しう寔に好都合で九郎も明日
 の侍従に召さるゝやうでございます夫も付て禮服や何かも皆伊灘君
 のを用立て下さる筈何かう何まで寔に御親切に方「左様か夫の重疊離
 有事や侍従との充分の事であつた全く大海鯉か一方ならぬ執成と
 見へる夫て九郎の何しました桐「それの只今に参ります明日の此家
 から出る積りて鯛「チャク」兄君も結構でね目出度今に歸りなら
 那の兄君のお好きな絹被を拵へさせませふと立て行く跡小桐子の夫に
 向ひ桐「夫に子貴君那家の奥君から内々御憑が有ましたが方「夫の
 何だ桐「鯛子の事を方「那を何爲と桐「伊灘君に妻せたいト方「夫
 の困た事だ桐「何故でございます方「實に今日鯉か斯々云咄が始つたが
 那の海鯉も商人なれども大家の事で殊に今回の御普請なども非常の
 親切行々の爲にもならふし充分の所シヤが大海鯉の當時内閣の權者
 なれは表の立派な遣てシヤが内證の餘り宜ない容子ヲヤ併九郎も一

方あらず世話になつて見れば寔に斷り惜いが何にしても兩端に掛つ
 て困つた事が出来た此方の爲に大海鯉の方は断ても海鯉の方仕
 度もサ桐「アでございますか今日奥君の容子が何も此事が有るので
 九郎の事も充分に往たかと思われまます方「夫は是れ是れ何程大海
 鯉でも人の穢を無理にとい言れまい桐「左様サ夫はろんな物てござ
 います子伊當人の胸を聞たう何でございませう方「夫はる前かう篤
 と聞くか宜か何方も断るに余程煩襖いテ随分困難たヨ桐「九郎も
 永々那家を修行も仕たし又今回の件もありまますから断る日には九郎
 の爲ふあらず困ました方「左様サア何にしろ九郎の身分は有難
 事シヤ御宮へ神酒でも上げて來ようト衣冠を調へて御宮の方へ出行
 ける跡に桐子は鯛子を招きて云々の趣を言聞せ桐「寔に兩方ともに
 義理合が有るので困たものだが前にはア何方か宜いと思ひだ無言
 て居ては分らないよ自分の一生の事ぶかられ言な鯛「妾の大海鯉君

の嫌でございます桐「何故鯛「何故でも官員の好ませんヨ桐「夫じ
 や海鮠社の方か宜かへ鯛「ハイ桐「夫ならそうとして慈父君に言は
 ふか何言様に断つたら宜かしらん其時九郎も翌日の支度旁大海鮠方
 より歸り來り侶に此啗を聞き九「鯛君も前大海鮠へ往サ左様それば僕
 も宜か行なはト僕が困るヨ鯛「兄君も困りでも妾の嫌でございます
 九「其様な事があるものか向ふの金が有ても商人だらう此方の侯爵
 じやアないか家だつても瘦ても枯ても貴族の内じやないか先生の氣
 を損ねると嚴父君の爲にも宜ない行玉へ鯛「嫌でスヨト少し涙
 聲に言の桐「泣すとも宜ヨ九郎君も最宜加減にをしる前のやうに
 言ても仕方がないよ九「だつても夫が至當の事デス桐「何程至當で
 も左様ばかりの行ないよ妾も明日の仕度をするのうね前髪でも缺て
 お出よ九「腹が空たなんぞ有ませんか鯛「兄君も好の絹袂を調へて
 置ましたヨ九「左様か夫りや難有島持て來て呉んな

◎第四回(全續)

江鯨方頭魚に婚儀を説く

燒野の雉子夜の鶴凡そ活とし活る者子に迷ふ親心幾人子を持ちたりと
 も皆夫々に行末を善れト祈る神前に建し鏡の明かなれと子故の闇に
 方頭魚が雲り勝なる胸の月晴すよしなき煩襟倅九郎は望の如く官途
 に就て嬉しやと一ツ叶へば又一ツ苦勞の出來し鯛子が縁談海鮠大海
 鮠兩家より双方等しく言辭れ振分がとき身一體に此方を立てれば彼方
 に障り何扱つたら宜らうかと口に諸の祝詞の誦も心に諸の工夫を
 懲し蛭子宮の神殿を今下り來る其所へ大海鮠侯の家從なる江鯨鯛四
 郎入來れハ心ならずも客間に通し衣冠の儘に席に臨み互ふ寒暖の口
 誦終りて鯛四郎ハ掌をつかへ江「諸昨日は九郎君にも結構に成せら
 れまして恐悦に存上ます當今は御學術も御上達で殊に御發明で被爲
 入ますかト侯爵も殊の外悦ばれまして退々御昇進で被爲入ませふと
 末憑もしく存うれまます方「イヤ最左様御賞賛が有てハ痛み入ます何

事も先生の御齋て御所へも出るやうふなり寔に大慶致して居ます彼も御邸内に居る内の貴君にも何角御厚情に相成忝うござる那通の我儘者嘸御世話がやけまゑたらう江一いへ何仕まして御心易達に失敬のみ言上しました借今日參上仕ましたは余の義でもござりませぬが若殿儀も最早青年になられますれば相應の縁談を取結ひ度存られますか勿論諸向より言籠もござりませぬが兎角本人の心は適ひませんので是まで其儘に打過ましたが一昨日御家の奥君へ奥方から委細お咄を言上うれました通り何か御家の嬢君を御相談下さる様今日の表向侯爵夫婦より言付にて罷出ました何が何分宜しう願ひ上ます又別段奥方より私へ内命でござりましたが御縁邊御相談に付ましては失敬ながら御家の御内情も豫て承知致されてござりませぬれば御支度其外の處へ如何様とも御相談言上ます百事御遠慮なく私へ仰聞うれませ決して御斟酌下さいませなト恩懇に演ければ方頭魚も甚はた當惑顔にて

方寔に不束な娘を左様仰下さる段千方忝き次第でござるが實に少々去方へ相談に取懸てござれば甚不本意ながら此儀ハ御断り言度ござるト氣の毒顔に断れハ充分脂のつた鱈四郎案外の面色にて江一ハ左様ふござりませぬかハ併し一昨日奥方より御内談言されました節に未だ孰れへも御相談もなされませぬ御容子又昨日にも他々よと言籠まれましたに致せ言さハ侯爵方が先口のやうにも存られ升か斯様言上てハ如何でござりますか侯爵にも御當家の事にハ格別御執持を致されまして言上るまで、もござりませぬが御前か當御宮へ御奉職ハ相成ましたも元ハ侯爵が心配致され夫に今回九郎君の御儀も元來那所へハ参り難い所を非常の盡力にて右の譯にござり升れば向來の御爲筋も御燕考遊されまして何か御挨拶を願度存ます侯爵儀も來早春にハ御用まで海外諸國を巡回致されますれば願はくは其前に御相談を取極め度存られ此段を言入うれました方ハ至極御尤の儀で

拙者も太だ心痛致して居が實の一昨日尊邸へ愚妻を差出た後にて右
 様の断が始り又其後へ愚妻が歸宅致して奥方よりの御内意も承知致
 した何分或方も内外據なき義利合が有るので實に當惑致して居ま
 す江一へ左様にござり升か其御縁談の何方でござり升か方一貴君
 も大概御承知で有うが那の海鯨社長の海鯨でござるが夫と言も當御
 宮の御修復も言上たり旁以種々の義利合で何も否とも言されず是の
 何分貴君へ折入ての御依頼シヤが何卒御主人閣下の御氣合を損ねぬ
 やう御執成を希ふが如何で有う江一御意をござり升か海鯨社なれば
 成程大家とい言ながら高が商人の義でござり升御當家の御格式にて
 の御内情の兎も角も余り御相當の御縁談も存られせん又主人奥方
 の御内談を言入られましたも然も同日の事にて未だ先方へ御挨拶も
 ござりませすの彼方の御破談になりましても候御方へ御相談下さる
 が至當かにも心得えられませすが如何でござりませふかと憚處なく言出

機 観

せば方頭魚此詞を聞き心中に愕然として此奴細四郎小サを形をして
 主人の權を鼻に掛己が意のみを通さんとして無理往生ふ承知せん
 と爲るの奇怪なりと立腹せしが有業老功なれと面を和げ貴君の御忠
 告も忝うでござるが何に致せ御即答にも参らねば篤と熟考の上拙者
 より御挨拶及びませう夫に昨日より嬢が少し勝れんので只今醫者
 も参て居るから細四郎もじりく焼かけて見たが脂がぬけて是は味
 噌を着たりと江一然らば今日の退散仕まして其趣委細主人共へ言
 ませふ左様なら御免を蒙ります方一是の御大儀千方何卒御兩君へ宜
 う御頼み言を引違て座敷へ出来るハ當時漢洋合壁醫問兼勤の鳥賊
 野甲庵甲一只今那方て篤と診察ました方一イヤ大き御苦勞相懸ま
 した時に何でござりませふ甲一ハイく嬢君の御不快は言さば血
 の道のお強いの被爲入ますが何か頻ふお塞になませが大了た事
 の被爲入ますまい夫ふ少々御邪氣の業も在つしやいます些御藥を食

機 観

上つたら宜うございませう其時下婢の島へ更に茶煙草盆を持出れば甲「モシ」女中藥籠を是へ願ひます頓て藥籠を持來れの恭しく調劑して甲「先是を差上置まそ水藥の御人を下さいませれば差上ませやうよ致しませふ御前も些御血食が勝れ遊ばしませんが何か遊ばしましたの方「イヤ何とも致したのでないが實の貴老の格別の御懇親故御断言すが寔に宜やうな事で困難か生じて嬢の不快も大畧夫から發つた事のやうに思われます甲「へい夫の何か御心配の筋でへい道理で如何にもお塞ぎが強いと存ままた兎角御婦人方の何もありません伺まして宜い筋なら方「へい實は一昨日より斯々の相談が双方一度に始つて心配して居る處へ又々今日大海鯉方から家扶を遣ひして云々に言籠れ何分双方侶に義理合が有のて殆ど困却致して居るが結局大海鯉方を断り度のシヤが何とか方便のござるまいか甲「成程夫の御心配も被爲入ませう是は寧打明て大海鯉侯へ實情を吐

に成たう如何でござりませう方「左様拙者も御同意で既に家扶の鯉四郎ふは其趣を言て依頼だか到底彼には執成が出来さうもないテ貴老も像て大海鯉へ御立入が有そふなが近頃御迷惑も、お氣遣扱て見て下さるまいか甲「へい實は私も那奥方との御慰みの御懇親で當節嬢を御側に願て置ますが宜うござい升一々様和と御咄を致して見ませふ方「何か左様願ひ度が甲「夫では孰れ其内伺ひます方「左様か今日は甚だ取込で一向に御構ひ言さんが悪からず甲「何仕まして折角嬢君を御大切に御機嫌克と歸り行を送り出て其儘居間の方へ至り方「何だナ何ぞ喰たか桐「何にも喰ないので困り升大海鯉君の家扶と何と言しました方「斯々言て來たかう己の斯々挨拶をしごが到底夫なりでは濟まいがト言て己が直談に行て其所がまづいから幸ひ鳥賊野の彼家に手寄か在から程宜扱を頼で遣た其様ふ心配爲ぬがよい嬢も氣を揉すと藥でも飲が宜ヨ少し邪熱も取りろうナ冷ない

やうにして鶏卵でも入れて雑水でも喰が宜からう何雑水の嫌だ夫
 ヤ湯漬でもお食り桐「お茶を熱くして佃煮でも茶漬をサラ」
 食りナ今夜ハ九郎の始ての泊りだが嘸寝屈で困りませふ子方「ナニ
 若者ハ然も無いのサ彼の書生風で遠慮がないか」直に馴染が出来
 舊と違て今ハ到々開けた者だ大分日が詰つて来た五時になると直に
 日か暮る御宮を勤めて来てから緩と飯に仕やう

◎第五回 (小路館の段) 鱈子鳥賊を説て鯛子を獲ふ

龍宮城外小路に一搦の邸宅あり四面ハ溝渠を深く回し煉瓦を以て
 築地を疊み門内の樹木翁鬱として繁茂し三層の樓閣ハ巍々然として
 雲に峙ち朱塗の高欄ハ日ハ映じて眩く五色の波璃窓ハ綾羅の純帳
 を覆げ庭上ハハ八丈龍國の奇石を集めて假山を築き遣水底を顯ハし
 て諸の魚鱗躍リ汀ハ神璣珊瑚の小磔を布き薫木花を戦ハして諸鳥
 群リ啄り香草花粉を飛して蝶蜂常に舞遊す春秋の詠め飽事ある夏冬

の興盡る事なし是即ち誰家ぞ大海鯉侯爵が邸宅あり門前に車を停め
 入来る者ハ誰ろ是醫師鳥賊野甲庵あり門衛に會釋して目禮するのみ
 別に名刺を出さざるハ豫て出入の懸意と見へたり頓て中の口の方に
 廻りて銅線の綱を引に遙に奥の方にて鈴の音聞へ馳て侍女の女童出
 來リ「ヤ鳥賊野さん被爲入まし甲「ハ今日ハ一寸伺ひまいた奥君
 に言上て下さい女「マアお上りなさいませト小室に案内し女童ハ奥
 に走り行き再回出來り直に側へ被爲入ませト甲「ハイト奥の
 間の方に至る廊下の側に女中の溜所あり其所に立寄て夫々に挨拶一
 て進物の包を解き甲「何卒御臺に上て御披露を願ひますと憑置て奥
 方の居間に至り敷居越に式禮すれば鱈「サア」すつとお這入なさ
 いませ甲「御免下さいませしト進み入り甲「ハ御機嫌能う余程朝夕
 ハ冷ます事毎もお障りも被爲入まんて恐悦娘が段々御懇命難有存
 ます母ハ宜う言上ましと鱈「ハイ有難う存ませ貴君も毎もお達者で

御新造さんも御異りのございませんかト言時待女のやりか(魚名)鎗鳥
 賊の密略(盗)盆に進物の菓子折を載せ持出て奥方(魚名)の前に直し
 ヤ「是の粗末の品でございませぬが親父が献上いたしましたト言は甲
 庵が娘なり鱒「左様かへる氣の毒なふよしなさればよしのに甲「甚
 だ粗末な品でござい升が夫は隣家で近來初免ました機焼でござい升
 大分當節は流行れて参りました鱒「夫は何よりお珍しは一寸やりか
 やト側に招き小聲にて呷くハ甲庵に一猪口出すべしといふ事ならん
 甲「未だ殿君は御歸館になりませぬか鱒「ハイ旦那ハ蛤街の屋氣樓
 に宴會があるの御所から直に回りますから今晚は少し晩くなりま
 せふ甲「左様で被爲入ますか今日は些妙なれ咄で上りましたが那の
 方頭魚さんより御依頼の一條で鱒「左様で御坐ますか若縁談の事で
 ハ御さいませんか甲「ハイ其件でございませぬ鱒「其件なら先日此
 方から言籠せましたが何だか變な譯て海鮓社の海鮓に相談を仕たと

の言事で断りたいやうな容子那れハ甲庵さん聞て下さい断られ
 た義理でハないのですヨ舊子方頭魚君も實に内證が苦しかけたのだ
 か(談)中折々下等の語あり宜しく此令聞の成長を察すべし段々の御
 頼みて旦那も種々周施して今のお宮もお持なさるやうお仕て上たの
 て夫からまた九郎君を書生同様に遣つて教授で實度と言ので丁度三
 年越此方で世話を仕ましたが何程何でも貴族の子息さんだから書生
 同様に遣はれもせず伊灘のれ朋友のやうに仕て上て夫から又種々頼
 みなさるものだから又旦那が骨を折て今度御所へ出さざるやうにし
 て上たので其時だつても禮服でも何でも不殘此方のを間に合せて上
 たり何か何までお世話を仕ましたのサ夫から那のお嬢の事ハ大概
 七月の事でした八龍館で舞踏會の時初めて那のお嬢を見ましたかと
 んだ容子の宜いお子を左様した處が伊灘が大層氣小入て是非賞ひ
 度と言ので此間彼方の奥君がお出の時妾から内聞を仕ました別

外へ口のか、つた容子もなし奥君の大層飲んでゝしたから表向舖四郎を遣ましたら急に變が替つて來ましたが容子を聞かぬ海鯨が御宮の御普請を仕たり何か仕て余程都合になる件か有のて方頭魚君も到々の方だか甘く執入なすつたのでせふが夫も他々な仕方もあいが商人の海鯨に金で堰かれと一言やうな譯で、余り此方か馬鹿に仕られるやうなものを夫に万一伊灘が放蕩でも發して遣いでもするト寔に困りまさアチ尤旦那那ア言ふ方だから先で左様いふ事な無理に貰はずとも宜と被仰げれども妾が何も氣が濟ません困る時ばかり何た彼だど人に骨を折せて今都合が少し直つて來たかうして最此方を壁ナニ用い無いといふやうな成され方で、些と違て居ませふシヤございませんの甲庵さん何れ思ひなさい升かト照焼の如く熱くなると無淀ふ喋り立られ有繫の鳥賊野も口を鉗みて開く事ならず只とろくと鱒子の方を見てありしが其時琉球朱の會席盆に吸物と刺身

を上げ侍女が持出て甲庵の前に居へ女「寔なる粗末でござい升がゐ一盃食上りまし甲「是は」恐入升た今一人の侍女か爛陶樽を持出て酌を爲す鱒「何もございませぬが心易達にお構ひ言ませぬから緩りどる食りなさいよ食りなごうお咄致しませふ甲「へイ相替トす難有存ます成程段々御情實を窺ひますト御尤な譯でござい升が實ハ昨日那の嬢君が御不快につさまして彼家さまへ出まじら大層御家の事を心配私へれ咄で御さいましたか全くの彼家の奥君が此方へれ出の跡へ海鯨社から言込ましたさうでスかう彼家の奥君は御存ない事のやうで夫に肝心の御當人が海鯨社へ往なさり度やうを容子でござり升から那の御相談の御止が宜じやございませぬか鱒「へー夫じや那嬢の伊灘を嫌ふのそすかチ甲「ナニ左様言ふ譯でもございませぬが何だか那家へ往なさりたいやうでございませぬ鱒「呆れかへつた物だ夫じや内々密通でも居たのじやアないか道理で先達て鱒

四郎が左様言ひましたは先頃や八龍館で海鰯と相對ひで咄をして居
 た嬢も何も方頭魚君の嬢君のやうだと言ひましたは夫じや左様でしよ
 ふ 甲「夫の如何か存ませんが尤那家の親御君も實に此家へは濟ない
 から御立腹のあいやうふ扱て貰ひ度と斯様御依頼へ今日の上りま
 したは何かた止めの方が宜しふございませう 鱈「夫じや貴君へ扱ひ
 を御頼みでフー夫じや先方の御勝手は宜うが此方は今まで種々骨
 を折た事が無ふなり升子甲庵さん貴君も扱を頼まれならば海鰯の
 方を破談にするやうに被成て下さいな 甲「イヤ夫の迎も私には出来
 ません 鱈「夫じや此方も出来な相談で併子甲庵さん那家とは何言
 御懇親かぞ存じませんが此方にはあゝしてやうかも居ますものだか
 り此方の爲を思て下さるのが眞實でせふ 甲「夫の如何にも左様で那
 家の言さる病家先の御懇意御家へ又格別の事で殊に奥君貴所との舊
 からの御馴染なり種々御最負ふ成升事ですら何事も御家のお爲を

關 機 視

存ますが是ばかりは何も無理やとふとも言されませんが何に致せ私
 の中ふ立て當惑致しまえた 鱈「何でも一旦の賞はあけれの此方の言
 状が立ませんが何しても呉あけれの何とか故障を入れて海鰯の方へも
 遣ないやうにの出来すまいか 甲「左様サ夫も變なもので又迂闊な
 事を致して殿君のお面に關てハ濟ませんから 鱈「左様サ子と暫時無
 言ふて有けるが 鱈「夫じや甲庵君斯致しませふ實ハ那嬢を相談する
 小就て那家の内証も知て居ますのら支度などは皆此家からする積で
 大概用意も調ました夫も無駄に成ても無益ませんかと一旦此家へ養
 女に貰て此方から海鰯へ遣る事に仕ませふ左様すれば此方の顔も立
 つし貴君のお面も立ますから 甲「成程夫の宜い御考でござい升ナ夫
 じや私も先家へ御挨拶の致方もあり宜えうござい升が夫で殿君の思
 召の如何でございませふ 鱈「夫の妾が能いやうに言ますから夫に且
 那の御用が多いからそんな事に關係して居られません 甲「夫でハ其

關 機 視

事小言入ませふ 鱈「何卒然う扱て下ぎいまし 甲「何事も迅速を尊び
 まをから直に方頭魚君へ参りませふ 鱈「夫じや何分宜やう小最一盃
 を飲なさいましコレ誰ぞお爛の宜いのを 甲「いへ最充分戴きました
 孰れ其内言上ますと忽々お挨拶して退き出中の口まで出る時娘のや
 りかご追駈出て小風呂敷に包みたる物を父に渡し別に袂より紙包を
 捉出し「此御菓子へ慈母君が好だのう上げて下さい然して子慈父
 君此中に包て有るのは琉球紬だが子内証で若旦那に戴いたかゝ裏丈
 買て下さいナ家かゝ遣た積て着るのたから 甲「フム左様か花色裏丈
 ナ ヤ「ア、左様サアノ方頭魚さんのね嬢君は何爲るのだへ 甲「己も
 扱を依頼れて見れば出入先の事だから嫌とも言はれず程能断をつけ
 よふと思つたが到底奥君が聞ねへから困たが一旦養女にして海鯨社
 へ遣ると言ひなざるのう左様なりや己も面が立から其事に爲る積り
 た ヤ「左様かへ若旦那の奥君に爲るのじやないチアノ奥君は言出す

と到底聞かないからチ 甲「何だつても舊が舊だから氣が強へヤト言
 時やりかは父慈の袂を引ば甲庵心着て四丁を見廻し 甲「迂濶な事は
 言れ子への人か居なくつて幸ひだ ヤ「夫じや慈母をんに宜く

◎第六回

前 方頭魚鱈子に婚姻を逼る

借も鳥賊野甲庵の其儘車を走らせて蛭子宮に到り方頭魚に對面を乞
 けれと神宮司も早速立出主客座定りて常例の挨拶終り 甲「今日は嬢
 君の如何で被爲入ますか 方「ハイずんど熱氣の去たうしうござるが
 未だ何も氣分が引立しませんで 甲「夫の「イヤ追々お快うございま
 せふ時に昨日御依頼の一條早速大海鯨侯へ参館致しまして段々御家
 の御實情も御断言し升と處 方「成程 甲「先方でも是迄一方ならず御
 入懇に成れた傍間柄の事はなりに御破談に成ましての後來御交際上
 じを關係を生じます場合で双方の爲にも成りませんから 方「ナル
 く御尤 甲「嬢君を一旦大海鯨侯の御養女に御賞ひ成されて 方「へ

甲「其上海鮭社へ御縁組成され度との事て夫に此回の御縁談に就まして此家の御内情も御存の事ゆへ實の御衣装の支度なども大畧出来ました御容子方「い、甲「夫是も無駄に成まして折角の御配慮も届かぬやうな譯合て是非とも左様成され度との事私も篤と熟考致しましたが彼方も名ふし負ふ當今の御身分柄ゆへ左様思召も至極御尤と存しますが左様成されてい如何でござりませふ方「夫でい職を養女にして海鮭方へ遣て呉れる積りて甲「如何にも左様方「夫の案外な事で牡丹餅で隣を撲る、やうな咄し定めて立腹も致されやうかと深く心痛致したるが實小大海鮭の當時の英雄シヤ有繋の大任を帯る、丈有て大度量恐入と夫で支度なども出来たといヤ最う迅速き事で恐縮々々左様ある事なら此方に決して異存のござらぬ双方波風た、すして婚儀も調ふ譯夫といふも全く貴老の御扱に憑てシヤ段々御苦勞添うござる海鮭方へ早速其趣を通じませふ又家内共へも言

聞せて安心を致させるでござらう一寸御待下さいと立んとするを甲庵は甲「今日は未だ兩三軒病家を見回りますから序ながら一寸磯君を診察まして御免を蒙ります方「御多忙の處を恐れ入た夫では失禮ながら一寸居間へ御通り下さい御病家へ御回りとあらば無理には言されぬが些御緩りでも宜しかうが甲「いへ又緩々伺ひます私も大に安心致しましたと鯛子の病氣を診察して急ぎ甲庵は歸りける斯て方頭魚親子は大海鮭が厚意を感佩して早速侯爵方へ至り是迄の謝儀を厚く述べ海鮭方へも其趣を言入侯爵にも來早春の海外へ出航の見込もへ孰れ婚姻入興は當年の内十一月の都て吉事小用ゆる月なれば多分其頃になるべしと熟談に及びけるが獨り鮭清吾の心中穏ならず或は故障の發らんかと人知れず心を痛めける去程に方頭魚の娘鯛子は日ならず病氣全快して双方公に願の上大海鮭侯爵の養女となり鯛小路の邸へ引移けるに侯爵は素より奥方儲子も眞實の娘の如く勤り

て別に一室の部屋を與へ是にて甲庵の娘やりのを附置萬事に不自由なく心着けられ鯛子も養父母の厚恩を感佩して彌身を慎み海嶼へ婚姻の日を待居たり猶又大海鯉侯爵の來早春海外諸國へ巡回の心組にて其準備を調へ居しか毎年神無月の初に大日本出雲國大社へ龍使を送らる、恒例なれば豫て其命を奉せし大臣俄に病氣ふて出帆なり難ければ大海鯉侯爵に其使節を兼て急ぎ出航せへき趣朝命下りければ取敢ず準備を調へ属官を從へて出航せられける此事火急の報知を得て方頭魚も急ぎ見送りとして走行しが既に瀛車に乗込場合に於て綴々離情も告がたく瀛車の窓より侯爵の方頭魚に向ひ家事の儀と委細愚妻に言置たれば宜きに憑むと以ふのみにて早笛聲の響き渡れば方頭魚も本意なく別を告て送りの人々と侶に歸りたる月日の鐵砲より速く立て早霜月の中旬に至れど婚姻の沙汰もなければ鮠清吾の焦慮て或日方頭魚方に到り互に時候の口籠を演べ清吾の席を進みつ、

清一既に先達て御約定の本月の御入興にもなり升やう被仰ましたのが最早十五日も過ぎますのに何の御沙汰もございせんが如何なるのでござり升か御容子を伺ひに出ました方「其事で拙者の素より愚妻も頗に心配致して居が既に過日も愚妻を刺小路へ遣した處が生憎奥方が不快なので對面も出來ず嬢に會て容子を尋ねたが成程種々支度のある容子に至極手厚くして呉らる、趣シヤが何時と言ふ事も分らず甚だ心ならず居ますが夫に那奥方へ到々氣性な人で一癖ある性質ゆへ万事任せて置くやうにと豫々言る、故怒い親共が喙を入れたと悪からうと差扣へて居たが左様べん〜と待ても居られぬ事もへ不日愚老が參つて篤と所存を承る積りじゃ今暫くお待下さい清一私方も凡本月十五日頃へと噂もござりました故大畧準備も調ひました夫小御家から遣はされるのなれ何事も御相談合で致し易うござり升が何分一枚那家がゑ道入になりましたので事が致し憎うござり

升万事先方の振合に随ひませんければなりませぬので方「御尤の
 事此方とても種々心構も有るゆへ先日鳥賊野氏にも内々問合とが
 何も判然致さず那仁も其後の更に参られす一向に矢束が扱れんので
 當惑して居ます清「左様なら御苦勞さまも一回お出向を願ひまし
 て何卒至急に事の運びますやう又來月にならまをと孰方でも御繁忙
 の時節殊に商家へ別しての事では非とも當月中に願ひ度ござり升方
 「一々御尤千萬愚老も御同様の事兎も角も早速出向まして御挨拶致
 しませふ清「夫で宜しう願ひますと清吾の歸りたる其翌日神官司
 の支度を調へ大海鮫邸に到り奥方に對面を乞けるに早速客間に通し
 茶菓の饗應丁寧にして聽て鱒子立出て互に細々と口誼を演侍女をし
 て鯛子にも殿父の來臨を報知ければ急ぎ立出るを見るに衣裳髪飾に
 至るまで皆新調の美麗を盡し家に在りし頃よりは一層嬋妍小粧はせ
 ければ方頭魚心中に其慈愛の厚きを喜悅一々禮謝を厚く演て今や婚

姻の事を言出さんかと幾回か咽まで出けるが奥方は万事如才なく鯛
 子が諸藝の事より始めて世上四方山の咄途切なく言出ければ神宮司
 口を開く暇なく思はず其際釣られて時を移しけるに侍女等は饗饌
 を運び出れば奥方自ら酌を捉て饗應等閑ならざれば方頭魚も有繋に
 辞み兼て覺へず盃の數を重ね酒氣充分に回りに堪難ければ再三再四
 盃を辞し今や言出さんと爲時奥方は會釋して暫時許し玉へと衝と席
 を立て入れば又言後れて如何せまじと心中甚だ安からず鯛子に容
 子を問んにも侍女等の手前もあれを夫をへ問事なとで扣居るふ再四
 奥方出來りて侍女小重の内三重ばかり風呂敷に包みたるを持せ鱒
 是の貴君の御手着也へお邪広ながら九郎君へお土産に遊ばして下さ
 いましやりかやお供へお渡し言しな方「夫は忍入ました下挨拶し愛
 で言ねば言時なト方「時に奥君段々不束な娘をる取回し下され千
 万忝く存ます夫に就き海鱒方よりも度々逼つて見ますが入興の式は

機 観

何頃の御見込やら萬事任任せ言てハ有もの、又少々心構へもござり
 升れば豫て伺ひ置度存ませが鯨「チャ左様でござい升か全体候爵が
 來春の出發の見込で居ましたから當中と存しましたか急に立やう
 に御沙汰になりまして御存の通り取る物も取り敢ず出立致しました
 故種々取込まして其事はつい承り置ませんでしたが留守中は何も左
 様言譯ふは参り兼ねせう方頭魚ハ案外の事故大きに驚愕き方「へ
 左様でござり升か併先達て御出發の砌見立言さふと存て停車場ま
 で出ましが最早御乗込ゆへ一寸御挨拶言と時委細家事の件は妻へ言
 置たから宜く頼むと被仰てございしました夫へ定免て是等の件は
 專要の儀故に言し置に成た事と推察致しまして鯨「左様でございま
 したか最も家事向の件は大略承り置ましたか婚禮あどの件は言まで
 もございせんが一代の大禮でござい升か何も私にも計ひ兼ねませ
 併し早速手紙を出しまして聞合せませうが今月の初旬に日本をば出

海鯨鯛子
 艶書を贈る



夜親画

何頃の御見込やら萬事に任せ言てハ有もの、又少々心構へもござり
 升れは豫て伺ひ置度存ませが鯨一ツヤ左横でござい升か全体侯爵が
 來春の出發の見込で居ましたから當中と存しましたが急に立やう
 に御沙汰になりまして御存の通り取る物も取り敢ず出立致しました
 故種々取送まして其事はつい承り置ませんでしたたが留守中は何も左
 様言譯ふは参り兼ませう方頭魚ハ案外の事故大きに驚愕き方一へ
 左様でござり升か併先達て御出發の砌お見立言さふと存て停車場ま
 で出ましが最早御乗込ゆへ一寸御挨拶言と時委細家事の件は妻へ言
 置たから宜く頼むと被仰てございしました夫へ定免て是等の件は
 專要の儀故に言し置に成た事と推察致しまして鯨一左様でございま
 したか最も家事向の件は大略承り置ましたが婚禮さどの件は言まで
 もございせんが一代の大禮でござい升か何も私にも言ひ兼ませ
 併し早速手紙を出しまして聞合せませうが今月の初旬に日本をば出



海鯨鯛子
 艶書を贈る

夜親画

視 機 關

祝致したと言ふ電報が参りましたが只今は何國小居ますか其後は未
 だ便りがございませぬ兎も角も出して見ませぬと雲を掴むやうなる
 挨拶に方頭魚大きに當惑せしが去とて奥方の言ふ處無理ならねば再
 回尋ぬるよしもかく潜かに鯛子と目を見合せ方「夫では甚だお手數
 なかり電報でもお打下さいませぬか 鱈「夫は最うお易い事でござい
 升が電報では委い事は分りませぬ日限や何かの事はかりならば宜う
 ござい升が何分大禮の事も身分相應の禮式もございませぬか何
 も夫の些分り兼ませぬ方「成程御尤マア何分宜う願ひ言ひませぬ今
 日ハ種々御丁寧の御禮應有存しました先お暇言ひませう 鱈「左様
 でござい升が一向お構ひ言ひませぬで失禮ながら奥君へ宜しう先日
 ハ寔に失禮致しましたと

◎第七回

鯛子節 威灘鯛子に艶書を贈る

野邊の色秋ハ千種の容々も夢となく行く冬枯の空ハ時雨も昨日今日

晴て小春の後れ日和に籬に植えし冬櫻も二輪三輪四輪開けども兎角
 開かぬ鯛子が心獨り己が部屋に在て太息熱々想ふやう昨日慈父君の
 出の時此方の養母君の御挨拶で海鯨社への嫁入も何時往れるか
 分ぬ容子夫に此間中か威灘君か人さへ居らねば洒落して聞度もな
 い淫言此方も義理ある兄妹と成て居れへまんざらに突々した事も言
 れず夫のまならず養母君も妾を嫁に仕度容子で種々御心切に仕て下
 さるのも其意が充分ある故變な破目に狭つて跡へも先へも行れぬ場
 合寔に困つた事に成たが何したう宜らうか此様を事なら此家へ來な
 ければ宜たが今更に詮方もなく家の慈母君にも相談したいが夫も勝
 手に行れもせず妾の何あつても三千尋君の外に夫の持まいト心に定
 めて居けれぞ余り此様に永く成ての万一先から飽か來て外から嫁で
 も行やうで生て居ても無詮は夫故磯部の章魚薬師様ハ靈驗で被爲
 入から入知れず信心を仕て居るが何卒御利益で一日も早く海鯨社へ

行度ものだト頰襟顔に居る處ろへ廊下の那方より此家の子息威灘
 磨ハ悉煙草を煙あがら四丁見廻して歩行より障子を明て威「チヤ鯛
 君一人かチ鯛「御兄君被爲入まし今日は寔に能いお天氣で威「幾等
 夫氣が能つても此方の心が晴ないぢやア終ツかト面白くないチ鯛「
 何か遊ばしましたか威「ナニ別ハ何も仕ないが子強顔ハ只一向に強
 顔かれ愁はれた面を三日の月風誘影が憎うしいッ鯛「大層意氣な事を
 被仰ますチ威「僕あんサア商人と違つて意氣な事ハ知らないが劇場
 で此様事を聞たのサ時ハ劇場といへば昨日ハ余り鬱悶するから萬年
 町の龜座へ往たが三立目が俵藤太の蝶蛸退治舞臺一ぱいの大道具で
 三上山のか、り勢田の橋の糺出サ二番目が大々出見尊の龍宮入鯛五
 郎の尊で津奈志(鯛ノ属)の龍女三幕目に龍女の子別がなか〜能い
 津奈志ハ歎愁が利のら何も泣せるよ中幕が浦島と乙姫の所作初が能
 が、りでははまた見ものだ鯛「夫は誰が致します威「浦島を伊佐吉

(魚名)乙姫を名吉(魚名)サ鯛「ナヤ」嘸能うございましてらうチ
 威「二人とも若輩で奇麗だらア、然うくた前に上やうと思つて
 筋書を持って来た後で緩りと御覽と懐中より取出して側に置き伊「た
 茶を一盃鯛「別に煎ませう伊「何夫で宜しいア、美味昨夜は些ト飲
 過て咽か乾く其時侍女のやりか威灘の居間の方より出来りてヤ「お
 部屋てお茶が出来ました威「左様の今此所で飲たヤ「先刻被仰た物
 が参りまえた威「夫じヤア往うト立ながら鯛子をじろりと視て威「
 ソレ是を此方へお仕舞なさいト劇場の筋書を渡し己が部屋に歸り行
 くやりかも其後に従ひて出行は鯛子の筋書を捉上上表紙を視て伊佐
 吉の宜俳優だ能似て居ると獨言て一枚披けの中に挟みたる物有て膝
 の上にはばりと落るを何心なく抜き見るに天地紅の奉書の手切に美
 かしき手跡にて
 過し多月八龍館にて君がればと(撥尾魚の小者)の優しさを人白魚

は鯉初て海士が焚火か胸の火に焦れ小比目魚不知火の心をくじ
 鳥賊ならん人傳ならで望潮魚の寄邊も波の底干なき戀慕の海に沈
 みての浮む瀬もなき煩襟鮎鯛見といふ亂れふし藻小住む貝の割壳
 に忘れんものと幾回か想ひ絶ても煩惱の断に断れぬ帯魚猛き鯉男
 も戀瘦て曇り勝なる月日貝愛に涙の鮎魚乾すよしもな兒袖袂朽春
 來魚此日頃縁あればや牛尾魚の家に移り來住て明暮ふ詠めも盡ぬ
 櫻鯛花の姿は優曇花か海月の骨の珍しく心も空に文鰐魚飛立ばか
 りの嬉しささいとゞ思ひの鰐魚心の丈を筆具に書盡されぬ藻盤草
 神に願ひを火魚いろよき返首を待候可祝戀しき鯛子鰐
 と認先あればハツト計りに愕死て偕は此方の推察の通り此身を靡の
 せ妻にせんと執念想ふ心なるの假令何程口説とも此方の心に三千尋
 へ立し誓ひの破るまじ然は去ながら此儘に毎まで斯して居る時海
 賊社へも行事ならず又挑まる、も怨襟けれ何いふ事ふ成らふも知

観 機 關

れずはて何したら宜らふかと心一つに置かねてほろりと落き袖の露
 庭の千種も霜枯て忍び音になく蟋蟀哀れ浮世を遺瀬なき折しも此所
 に人來る氣合通勤の鉞線女の虎魚(魚名)襦をそつと押開き虎一に
 君お一人鯛一ヲヤ鉞線女さんお這入なさい虎一貴嬢大層に顔色が悪
 いよ何のなきいましてか鯛一何も寔に氣分が勝れあいで虎一種々
 御苦勞が有ので察し言しまそよ今日と奥君が留守で鳥度能い折
 だから貴嬢に一寸ね咄かあるンで來ましたが子速から心易くはな
 りましたが未だ染々お咄も仕ませんだつたが私ア甲庵さんと前か
 心易くつて那方の世話も御家へ裁縫小上と升が子鯛一ヲヤ左様をござ
 い升たか虎一夫だか貴嬢の事へ能く知て居ますよ余り貴嬢が可
 愛さふだから極内でお咄をしますが子貴嬢方へ人が能から全く欺
 されて此家へ被爲入たんでスヨ舊子ね嬢君お聞なきいヨ此家の若旦那
 那が貴嬢を懸慕て子是非とも賞度と被仰ので貴嬢のお家へ言込だ處

観 機 關

が海鯨社へ伊相談か有のでお断りになりましてう鯛一エ、虎一
 夫て奥君が焦慮と成て貴嬢を養女ふして此家へ引取て然して甘く若
 旦那に配偶やうといふ積りサ其首で首尾よく往ばよし貴嬢か何して
 も若旦那を嫌て言事を聞なざらなければ海鯨社へも遣らず毎迄も
 此家に置いて愛目を見せよふと以ふ策略サ何と驚愕成るだらう其首
 で貴嬢の御親君達が左右被仰ても養女に致した廉か有のう表て喰ふと
 炎て喰ふと此家の勝手だと言譯サ夫に那の奥君が今じや虫も殺さな
 いやうな顔をしてお出だが子何だつてもお前さん舊夫に蛤街の新道
 に居た藝妓で鳴した倒く強者でサア子又若旦那も倒々好色だから
 矢張蛤街の小伊奈といふ藝妓お熱く成て居ますが夫も先に好男子が
 有ぎふサ然して此家へ來る女の少し美麗して居ると皆手をつけるん
 でスヨ假令貴嬢が奥君に成た處が苦勞は絶ませんよ終是愛に居ちやア
 仕方がないか子何かしてお家へお歸なきいな鯛一へい左様をそか夫

じや素より海鯨社へ遣る積りでなさいのです子虎「エ、左様ですと
 も鯛「夫じやア何したら宜らうか 虎「何夫リや貴嬢の御了簡次第で
 妾が何にでも仕て上ますが併貴嬢が強氣仕なくつちやいけません鯛
 「寔に御深切に難有何しても妾へ海鯨社へ往度の虎「ソリヤ御尤具
 實の所だもの鯛「併し容易に家へ歸しますまい 虎「夫だから強氣
 しなくつちやいけないと旨のでス左様爲るのにハ斯ですと耳に口寄
 るを耳き示せば鯛子は莞爾と點頭で鯛「左様行ませふか 虎「妾が附て
 居りや行ますとも併し人に氣附れちやア行ませんせ夫に那やりかさ
 んは此方の味方だから大丈夫サ鯛「夫じやア何卒然して下さいな 虎
 「何でも少しの内だのう奥君にも若旦那にも氣休を言てね置なさい
 妾が折を見て甘く遣ますか多些たア覺悟を仕なくつちやア以けませ
 んヨ鯛「ハイ其時門内馬車の音して御歸館と一躍高く叫べハ 虎「ソ
 レ奥君がた歸りたト倍に玄關に出迎へぬ



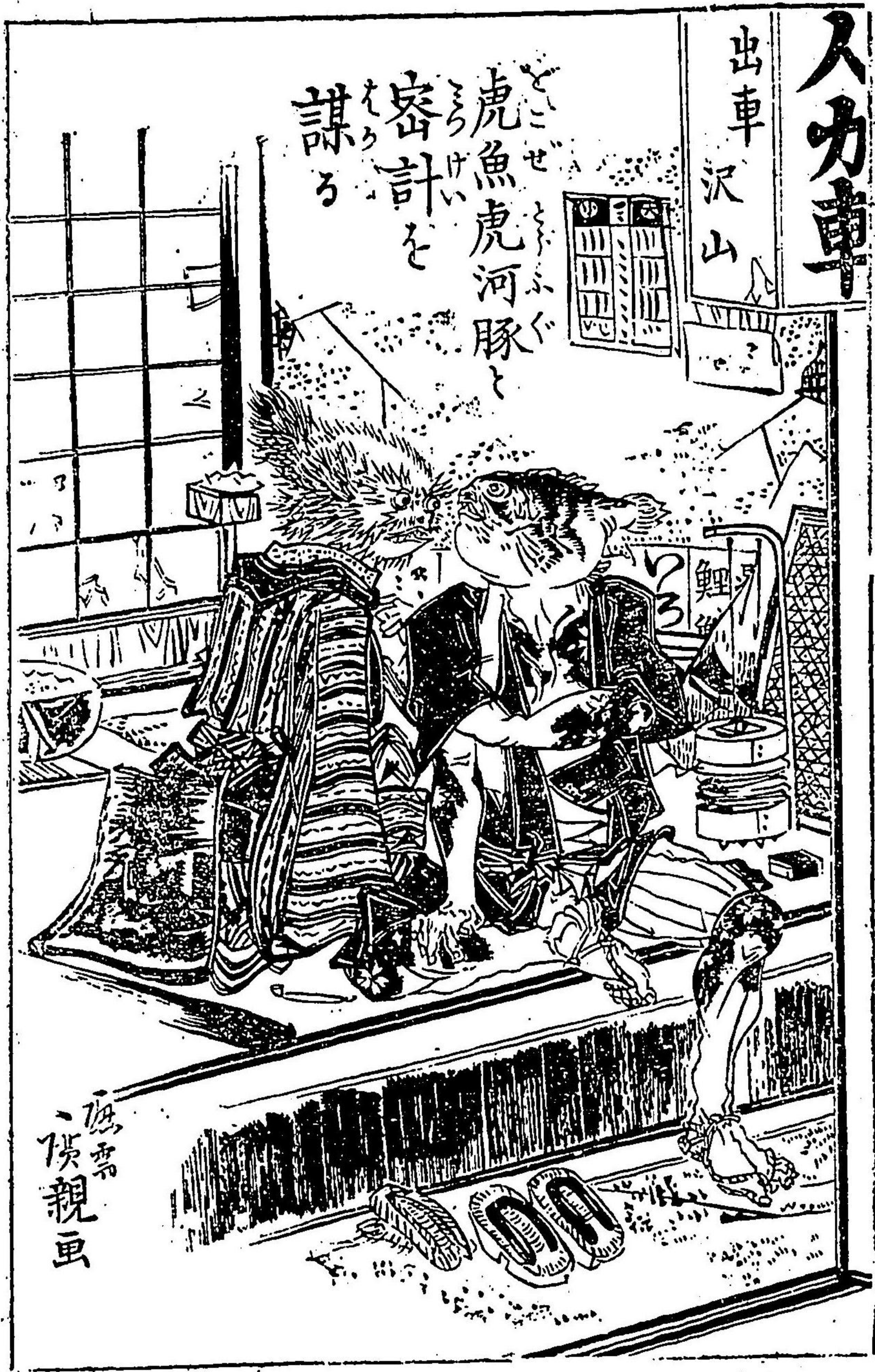
人力車

出車 沢山

虎魚虎河豚
密計を
謀る

高橋親画

じや素より海鯨社へ遣る積りでハるいのです子虎「エ、左様ですと
 も鯛「夫じやア何したら宜らうか虎「何夫りや貴嬢の御了簡次第で
 妾が何にでも任せて上ますが併貴嬢が強氣仕なくつちやいけません鯛
 「定に御深切に難有伺しても妾ハ海鯨社へ往度の虎「ソリヤ御尤眞
 實の所だもの鯛「併し容易に家へハ歸しますまい虎「夫だから強氣
 しなくつちやいけなと言のでス左様爲るのにハ斯ですと耳に口寄
 せ呷き示せば鯛子は莞爾と點頭て鯛「左様行ませふか虎「妾が附て
 居りや行ますとも併し人に氣附れちやア行ませんせ夫に那やりかさ
 んは此方の味方だから大丈夫サ鯛「夫じやア何卒然して下さいな虎
 「何でも少しの内だの奥君にも若旦那にも氣休を言てて置なさい
 妾が折を見て甘く遣ますかう些たア覺悟を仕なくつちやア以けませ
 んヨ鯛「ハイ其時門内馬車の音して御歸館と一聲高く叫べハ虎「ソ
 レ奥君が来歸りだト侶に玄關に出迎へぬ



◎ 第八回

車屋 虎魚 虎河豚 と密計を謀る

黒染新道の新開街に二間間口の角長屋腰障子車屋と太字に書て側
 の柱に懸し角行燈小出車澤山人力車と墨黒々と記せし家は是なん虎
 魚が後添の夫車や海老藏が住家なり此海老藏の正直者ふて年輪も虎
 魚より十斗り増て以前に荷車を挽たるが承年體を遣ひし故近頃腰も
 太く屈り渡世も心に任せねば些の貯を資本とし又虎魚が働にて出入
 郎へ金主を憑え四五輛車を調へて放蕩車夫を四五人置き車宿を初め
 しが遊で居ては勿体なしと己の小き車を製へ貝壳細工の花簪を諸方
 の縁日に賣歩行けハ家ハ多く留守勝にて虎魚の針の利を以て裁縫
 を内職に務しが従前より知己なる烏賊野甲庵が口入ふて近年大海鯉
 家の鼠負を請一家の裁縫を取纏めて或ハ郎へ出仕事し又ハ家持持
 りて毎も手明ハあけれども何處かに抜目の有かして稼ぐ小追着貧乏
 を虎魚ハ左のま苦にもせず家の渡世が車やとて家業を大事に守りて

や三寸不爛の口車に出入郎を始として己か夫の海老造まで丸め込
 る働者夫の太く年老て其具棒の働が鈍くなりしか不足にて流浪者の
 食客虎河豚毒藏(魚名)と怪しき中ふて此奴を日毎車へ回せと賭博の
 負債に其首の回り兼たる債を幾回減で際りても仕立業なき百結布俵
 捨難き悪縁の糸も續かぬ細手業今回の負債の嵩高にて何して九兩の
 昔の事今世の口へも九圓何程仕着法被の袖狭き世間を廣く爲て道ら
 んと二重三重の工師して四十女の愚に返り有聲戀にの深切者其深切
 を見込でか又口車に載られてか親しみ睦む娘あり年齢十八九にして
 容貌美はしく人品能れを野暮なうす琉球袖の縮小袖に黒縞子の丸
 帯を太鼓に結び小風呂敷を抱へし執れ郎方の侍女風にて表口より
 差覗き娘「サヤ叔母さん一人かへ虎」やりかさんか何所へ出るや
 「お使に出る序に一寸寄との虎」丁度宜所だ誰も居あいからる上り
 日茶でも煎るかちや「伯父さんも虎」雑魚場の地蔵様へ往つたの

や「左様かへ御免なさいと上へ登りや」妾じやる蕎麥が喰ふはが干
 叔母さんも喰ふな左様して誰か頼んで下さいな奢るから虎「やア
 さん留守番してゐ呉なら妾が往つて来ようや」夫ヒやアお氣の毒だ
 子虎「給で見たやうだらうや」口が悪いヨ虎「尺も悪からうや」最
 う宜よ妾ア天歎羅が宜よね前ハ虎「若旦那に貰た糸大分氣質が宜い
 や」何でも宜から早く往てゐ出よ虎「奥君往て参り升ッ馳て虎魚は
 出行しが程なく戻つて箱火鉢の火を掻立て番茶を煎て汲で出し虎「
 是でも煮花だよや」モ一お構ひでなヨと言ふうち蕎麥やの出前の
 箱を擔ひで「へいお詠へと持込ばや」叔母さん冷ないうち喰よふと
 二人て相對で井を捉上げ遠慮なければ混喰小宛ら逸馬の走るが如く
 秋風一度小發るが如く騒々々々として喰終りや「ア、美味つた虎「
 大層暖になほさ子や」那の一件ハ何る仕だ虎「一昨日鳥度宜折が有
 たのら此問お前に咄して置たやうに甘く言合で充分瞞着で置たが何

観 機 關

も穩順過るから首尾能く往ば宜がや「叔母さん折角那ア言てる呉だが子何も險難だから止む言く往ない日ふア騒動だヨ虎「何お心配でない其首は妾が附て居らア子然えて前だッても終是從君命たかふふやア何國までも甘く遣子へのへ損ぶヨ假令奥君にたら子へまでも嬖女になつても宜や子る前か左様ありや慈父達を始め妾も又出遣入ても大きに都合か宜し那のお嬢も願つたり付たりだ子や「ア、夫リや然うだが例々若旦那も多情から子夫でも大層宜く爲て下さるよ虎「御馳走の仕振が宜からだらうや「又其様な事を言て嫌だヨ虎「夫か肝心要だア子アノ前少し持て居るなら貸て呉な一寸遣探をして直返却からや「此間家へ遣たり何か爲たから澤山はないヨ虎「何少しでも宜が何程有んだへや「今爰に二圓ばかり有るけれど少しは持て居ると困るのら壹圓貸て上よう虎「此裁縫が上りやア返すから最五十錢を貸ナや「夫じやア左様仕やうと幸爾袋より壹圓五十

観 機 關

錢掘出し別に蕎麥代を置は虎「未だ余程有じやアないかや「是りやア奥君の買物の貼錢だヨ夫じやア又來まをヨお邪広さまト立上れば虎「有難う寔にる星々御馳走さま明日はまた御邸へ行ヨや「左様なふと表へ出る向ふより車夫の毒藏ハ空車を引だケットウを被りて寒きうに歸り來り毒「お嬢君御邸まで参やしようや「毒さん戲言言ちやアいけないヨ毒「ハ、いと笑ひながら表口より車を引込み「ア、寒いお前一人か虎「ア、今日ハ些たア懸たかへ毒「無体無駄ヨ何だ強氣に奢り込だナ虎「今那嬢が來て奢つたのヨ毒「残つちア居絲へか虎「大方左様言だらうと思つて己が喰のを一盃殘して置た毒「其奴ア難有エム！天駄羅で居やアがる虎「火鉢へかけて暖めて喰テ！毒「土鍋でか虎「氣の利子へ其儘五徳へ懸ねへナ毒「人をつけ破らアナ虎「お前も放蕩にも似合ねへ碗底へ睡て三回呪つて懸るんダアナ毒「エ、ユウ放蕩ノて其標に安くするナへ是でも鱈魚親分の御

子こ一いち番ばん開ひら運うん幸さい福ふくて來きリア喰く殘ざんのこ驚おど麥むぎなんザア喰くンぢや子へヤ虎こ一いち強かう勢せい大だい束たばをきめる子こ毒どく一いち熱ねつッ、碗いぼ尻しつて火か傷やけどをした至當ちやうヨ直ちかに持もチヤ其その筈はずダ蓋ふたの上うへへ載のって喰く子こへナ氣きの利り子こへ毒一いち産うが上じやう等とうだから其その様ようナ下げ賤せんナ事ことア御ご存ぞんし子へヤナ虎こ一いちおつう被お仰やうらアチイ毒どくさん丁度ど誰たれも居ゐ子こへかう些ち咄はなしが有ある毒一いち些ちたア工く面めんが出來きとか虎こ一いち夫おも然さうだが一いち寸すん今いま那あの娘むすめに壹いち兩りやう二に分ぶん借かとのヨ併ひ又また吞のちヤ往い子こへヨ些ちとでも義ぎ理りの悲い所ところへ返かへし子へ夫にまだ御ご膳ぜん上じやう等とうといふ咄はなしが有ある毒一いち何なんだか強かう勢せい前ぜん座ざが永ながいな虎こ一いちマア火か桶づくの側そばへ來き子こへ毒一いち晝ひる日ひ中なか外がわ見み恐おそせ虎こ一いちへン止とじしてもお呉くれる前じヤア有あるゆへしマア斯か云い譯わけだ毒一いち左さ機き言ご譯わけの虎一いちナンダへイケ嫌きら子こへ那の大海かい鯁ぎやう君きみの家ホ子來きて居ゐるお嬢ぢやう君きみが在あるンだ毒一いち夫おが己おれおど絶たつてか虎こ一いちエ、此この人ひとア抓つか滅めつよ夫おが斯か云い譯わけで斯か言ご譯わけふなつたのヨ又また片かた々々に斯か言ご譯わけふ譯が有あるンだ夫で妾めかけに種くさ々々咄はなしが有あるこのヨ其その首くびで妾めかけが斯か云いふ考かんがへ斯々々言いつて置おきこのヨ因よ去り此この方かたは斯か云い譯わけ

梅うめにして斯か爲なれは極ごく上じやう首くび尾びンだ夫おに最もう宿やど六むも先まが見へて居ゐるから置お去りドロンで夫おから先ま途ちア何なんでも成なアる前まへも爰こゝの所ところらア一いち狂きやう言ご遣ちなクツチヤ往い子こへヨ然さうう腹はらが極ごくリア人ひとの物ものだつて構かまやア一いちねへお前まへにも寒さむくねへやうに爲なるし己おれも些ちとア覺かく悟ごを爲ならアナ毒一いち成な程ほど強かう氣きな計けい策さくを考かんがへたナ己よりか余あま程ほど度ど胸むねが宜よろし虎一いち當あた然ぜんサ其その位くらいな度ど胸むねがなくつて密みつ夫おが出來きるものか毒一いち嗚な呼こびねへ虎一いち怯おそかへも凄せまじい苛いら酷こくヨ毒一いちア、痛いたへ虎一いち夫おで其その件けん毎まい若わ手てるンダ虎一いち未まだ日ひは分わからないが子こ大お畧りやく來き月げつの初はつ旬じゆんサ毎まい年ねん極ごくて那あの家うちの中なか御ご親おん類るいに年とし忘わすれが有あるンデ往い子この女當あた日ひにヤ女むすめ中なかや書し生せいや何なんか許ゆるりで己おれも留とど守まも番ばんに往い子こだから此この日ひか宜よろらう手て筈はずハ其その前まへに能あたるがお前まへ強かう氣き遣ちるかへ毒一いち夫おリア遣ちるくつて待まち子こへヨ遠とほ州しゆ相あ良らハ斯かたから親おん分ぶんの所ところを憑たのむが宜よろし虎一いち夫おも然さうと子こ少すこしの間まだから我われ慢まんして寒さむい思おもひ爲なる居ねへ毒どく一いちウン夫おりや宜よろとも虎一いち夫おでも朋とも友ともア大だい事じだのらマ是これ丈だけでも持もつて往いて

返して來ねへナ毒一然か夫じや借て往う嗣服でも貸て呉ねへ寒いか
 ら虎一夫じや是を替てた出又負れちやア往ねへヨ毒一今の咄の摩な
 ら最う當分博奕やア爲子へ虎一野郎共の歸うねへ中か飯を喰て往糸
 へナ丁度茶が沸た一所に喰やう毒一余と寒い一寸二錢貸子へひつ
 かけて來るからト錢を掴んで筋向の酒屋に至り硝子盃に一盃ぐい飲
 して盃を掴で一寸管め馳て戻りて茶漬を搦込み毒一夫之やア往て來
 せ虎一余り更糸へ中に歸ねへヨ

◎第九回

章魚藥師 章魚寺に鱈魚鯛子を救ふ

時ハ師走の初の八日大海鮭家にハ例年の如く忘年会ふ招かれて奥方
 始め伊灘丸侍女やりかを召運て江鯨鯛四郎を御者として馬車にて午
 後より出られれば留守は侍女下婢に養生兩人在るのみにて虎魚ハ
 朝より掃易て何くれと心を配り鯛子の心地惱しとて部屋ふ打臥て居
 たりれば留守居の男女集會て鬼の留守の洗濯とて骨牌を捉て笑ひ

騒然に更に余念ハ無りけれモ虎魚は鯛子を看病んとて其座を外して
 部屋に行き夜着を捲りて耳に口寄せ虎一ハ磯君日が暮て時分は宜し
 い衆人が骨牌で夢中になつて居るから此間に早く往ませう其様に取
 慥へて居ちやア詮方がない速く頭巾を被りあさいもつと着服を更
 壯と蹙て此上草履を履なさい其包ハ妾か持から懐中の物を落さな
 いやう小髓り妾に擁つて被爲入と尙後を臥たる体にもてなし潜びて
 廊下より庭に下立ち豫て案内知たる裏口の非常門の鍵を外し難なく
 外へ連出れハ待儲けたる毒藏ハ面を包みて車を寄せ二人を載せて観
 を覆り飛が如くに駈出し宵月ながら雪催ひに空は曇りて暈けなる
 を二三町混走りし馳て車を停めつ、マッチを摺て挑燈を點け態と手
 拭にて挑燈を卷尙駄邊に走出て漸衛家を出離れつ、並木蕭疎の磯際
 を喘ぎくして走りしが爰に一個の大寺あり樹木森々と立列なり八足
 山章魚寺とて昔時ハ大伽藍の鹽場なりしが物換り星移り今ハ藥師堂の

あるのゝにて一大公園地となりたれば境内阡陌の通路あり此日の八
 日の事なれば章魚薬師の縁日なれば神佛侶に霜枯れてハ詣る人も稀
 なるに殊に今夜ハ雪催ひに空搔雲りて吹荒む風ハ刃金のあるかと思
 これ膚も切らる、計りにて人の足さへ途絶えれハ商人なども皆引て
 最と寂實き其中に堂の側の額堂に毎も常店の茶屋ありて餅甘酒もど
 賣る家あり其家ハ未だ表間口の腰障子を建し迄にて尙商業を仕て居
 れハ毒藏ハ楯を止め車の中を覗き込も毒一是のらの道が骨た爰て腹
 を拵へなくツちやア先へ往ちやア仕方子へ少し下りて呉ねへ虎一
 お嬢君一寸下りて下さいと虎魚ハ先に車を下りて戦慄き震ふ鯛子の
 手を取り餅屋の店に伴ひ入れ虎一毒さん御宗旨違ひダガハ雑煮でも
 喰て充分腹を拵へ子へお嬢君も何かお上りあさいナ鯛一妾ハ何も喰
 くれません虎一其様に變な容子をなさると嫌に人ハ氣取られると思
 いから平氣な顔をしてお出あさいト小聲に唄き雜煮汁粉を眺へて其

間に己が持來りし風呂敷包を提出し鯛子が着替の包と一所に再回車
 の中箱ハ収め充分に身支度なし毒藏俱侶混喰へ鯛子の茶さへ喉に
 通す頻りに胸のこ毒きて何となく虎魚が素振怪しければ四丁楯露
 く見回せば章魚を畫きし大小の額數多長押し掲げあれば睡を止め
 て能く視れば孰れも心願成就章魚薬師と認めて袋に納め去物なり心
 中甚だ安からず獨り胸裡ハ想ふやう章魚薬師と言ふは外にハあつじ
 定めて磯邊の公園ハうん巳も嚮小慈父と侶に遙々詣でし事のあり己
 が家とハ東西ハ相距る事凡そ二里余何故爰所には來しならん又那の
 車夫の面魂兎悪ふして眼中鋭く一癖あるべき容子にて太く虎魚と親
 み深し虎魚が夫は年老て今は車を曳かぬと聞しに言語遣ひも夫婦に
 等し變な容子と怪れハ愈怯氣だつものから鯛一鍼線女さん爰は何處
 でしよふト小聲に問へば虎一此所は磯邊の公園地でヌヨ鯛一夫じや
 家の方とハ大層違ひます子虎一エハ大違サ鯛一夫じや今夜家ハは行

ないのですカ虎魚は四丁見回して頻りに他聞を氣遣ひながら尙小音に唄くやう虎「今夜直に家へ往ますト親御さん達か均然なさるか
 ら今夜の妾の親類の所へ泊て明日の家へも運まふし升ヨ鯛「オヤオヤ然うと均然して再回胸塞がり面色宛土の如く今更何とも詮方なく只心中に南無薬師大慈大悲の誓ひもて異なく家に到るやう守らせ玉へと念じつ、亦言趣もなかりける虎「モウ腹が出来たか行う七毒「ウー最大丈夫だ夜通し遣ても平氣なもんだ併し用心に那の大福を買って往う虎「然サ夫が宜らうト虎魚の店の拂ををし毒藏は挑燈へ蠟燭の火を繼足し先に出で候を掲げ虎「は嬢君先へ御乗なせト言ふ小鯛子も詮方なく怯々車の上に乗る虎魚も續いて乗ふんとする時思ひがけなき側より虎魚今時分何所へ往んだト言はれて均然願回れば豈圖らんや其人ハ夫海老藏にて有ければ愈々驚愕き狼狽して疵持の身ふハ一言の返答をへも速に出ず虎「ヤ、ハ前は海老藏さんア

ノト子那の妾ハ嬢君のお供でアノ一に参詣に來たのサ海「何所の嬢君の虎「アノ一大海鯉君の海「ヤア手前ハ毒藏だナ己の仕舞て置た胸服を着て居るナ速から怪しいと勘着たが血を堪へて容子を見て居リア何か已等の惡法書でドロンをさめる計策だナ大海鯉君の嬢君が今時分來るもんか何でも怪しい了簡が有ぞ縁日仲間の交際で此所の家ア悪信ヲ糺さずへ内ア合點なら子へ中の娘さんも此所へ出なせト老の一徹唄り立れば餅屋の店にも何事と皆立出る形容なれを虎魚も今ハ絶体絶命毒藏ハ夫と胸し逃んとするを海老藏が夫遣てはト追すがる袖を拂て駈出ば此方は毒藏南無三ト鯛子を載たる其儘にて道を轉じて走り出すを鯛子は驚き音揚て鯛「ア、往ちやア能ナイ車屋待てれ呉れヨ鍼線女さん早く來て下さい車屋後生だから待てお呉れヨ海老藏は又聲振立海「此女ア太へ女ヲ待アがれト怒氣盛に追蒐れぞ有繫老人の悲しさハ息切して堪難く待やアハ女やアハ罰當りと

尙叫びつゝ、退行ける此方の鯛子が車の中ふて泣聲にて車屋に待てよ
 くと呼びけれぬ毒藏今の面倒なりと俄に車を停むれを卻合に鯛子
 の轉び落咄嗟やと叫ぶを抱起し其儘猿轡を喰んとすれハ倍鯛子の驚
 愕て「アレ助てト一聲叫へハ毒「コチ柔順く無言て居子へト再回締
 る手拭を鯛子ハ一生懸命小顔を捻れば毒藏が手元狂ふて咽元を繰れ
 パアツト一聲叫び其儘息の絶にける折筋來懸る一人の男雲突く如き
 角力取矢庭に毒藏が襟髪掴と動と投れば二三間筋斗切て跳飛され大
 木の株小肋を撲れ其儘此所に悶絶す其時角力取ハ遠しく鯛子が倒に
 歩行と寄り角「ヤア是リア氣絶したナチイ娘さん正氣なせへチイ娘
 さんと幾回呼でも答あけれハ莽々四丁を見回せハ半燃たる挑燈を見
 て是屈竟と拾ひ取幸ひ中ふマツナも有れば燃残たる蠟燭に灯を照し
 て袖にて覆ひ再回娘が容子を見るに賤からざる身装にて咽の邊を繰
 られたれハ角「ア是りや縁救したのだ非道な事を仕をつたナト矢

庭に首の手拭を解何か助ける仕方ハ無かと抱起せば懐中よりばつた
 リ落る薬入を捉上挑燈に照し見て 角「是リア見覺へのある薬入だか
 ナ、夫々海鮎社の旦那が能々日本から購入した品だ何して此娘が持て
 居るか然して見れハ此人ハ旦那の御親類の方だらう先何にしろ此薬
 をト薬入の捻止を抜き切齒たる口を押明け薬を入れて小溝の流れを掬
 ひ来て口中に注ぎ入れ素より角力の手練なれば急所ハ小活を入れ
 ば未だ命數盡ざるにや忽地に息出れば尙客ハ介抱し漸人心地着
 しかば角「娘さん氣が着ましたかア、先宜つた鯛何所の方か存ませ
 んが寔ハ御親切ハ難有存ませた角「お前君は何處の方た何言ふ譯で此
 様な目小會なすつた鯛「ハイ角「ハイじやア分らねへ吾が送つて進せ
 ませふ第一此薬入は吾が旦那の所持の品だか是を持って居なざるか
 は海鮎君の御親類か糸鯛「貴君ハ海鮎社の方でござい升か角「吾は
 鮎武松と云ふ角力取でござんすが吾が伯父御の鮎清吾ハ海鮎社の支配

人少其縁で旦那小最負になり常平常お店へ遣入り込で居ます何言ふ
 譯が有かり知ぬが吾に何も遠慮はない終斯々と咄しなせへ鯛サ
 ヤ然でござい升か夫じやア何を包みませうと始終の一伍一什を事落も
 なく物語れば武「ハ一 Cheng 然云ふ譯か子夫じやア全く此奴等か甘く
 お前君を欺して勾引了簡だらう何にしても然言譯ではお家へ直に
 も行れまい幸此先の磯端に伯父御の別荘が有ヤス吾も今其所かとの
 歸りサ伯父御も今夜は其所に居るか、伯父御の家へ行ませう最直だ
 から強氣してお歩行なせへ夫とも歩行れさア負ひませふか鯛「否何
 歩行れます夫じや何卒お連なすつて下さし折しも章魚寺の鐘の
 の聲陰小籠りて聞ゆれり武「ア、最う一時だ

◎第十回 磯邊公 鱈魚鱈魚鱈魚等が喧嘩を和解す
 狼も人に食る、塞さかなト山崎信長が口吟としの奸悪非道を警戒す
 る宜兒世の中の教訓にて譬へ此所に狼取りて人の臭氣を嗅着て喰

んと出れハ生憎に獵士の鐵砲に打殺され獸類店に罾かれて寒夜の藥
 喰にせらる、を云ふ是虎魚等が舉動にて既に鯛子を欺て食物にせん
 と思ひきや忽ち海老藏に見咎められ今予惡事の露顯先露直遁走り
 那方此方ト道を綾取り漸く木立の繁生に隠れ息を忍して窺へば海老
 藏と老の悲しぎに足元弱くて後れまかば一徹に先へ逃しと心得喘々
 て追行を遺過して潜出舊來し道を混走り小毒藏が跡を慕ひつ、途か
 に向ふを透し見れば車の側に人ありて挑燈の灯さへ見へければ必定
 毒藏が待居るならんと心嬉しく近接けと疵持身にハ毒藏かと聲も立
 兼潜寄り並木の蔭より窺へば二王の如き角力取鯛子を馴り介抱なし
 今將正氣着る容子にて毒藏はある事なければ怪しむつ、も氣遣は
 しく尙を間近く潜び寄り一伍一什を聞取て心中倍々驚愕しが見咎め
 られては身の大事と息を忍して居りしかば颯て鱈魚武松は鯛子を慰
 め勵まして磯端の鱈が家小伴ひ行を見送り果初て吻と息を突き氣遣

かしきは毒蔵なりと那方此方を察れど木の下の闇の暗けれと摩廻りつ、
 思はずもはたと躍ぎ到しが下ふはウンと唸く聲に恟となしつ、飛退
 しが心を静めて再回近寄熟々容子を窺ふに是別人ならず毒蔵なれば
 抱き起して潜音虎「ナイ毒さん己だヨナイ毒さん何仕たのダお前
 が利れ子へかナイ強性爲子へナと揺起せど返辭なく息も絶々に唸く
 のみ此ぞ开も如何と肝潰れ虎「ナイ毒さん強性して呉子へ平常の氣
 小も似合子へお前何か殺爲たのの薬は持す詮方が子へト四丁を視れ
 ば小溝の流潺湲と音のすれば是幸ひと手拭に浸し口に數回締込ば咽
 に通りし容子にて漸くに心づき最哀れなる聲音にて毒「誰た虎「己
 だ毒「虎魚か虎「ア、強性して呉ねへ毒「己ヤ角力取の野郎お投
 殺された最生子へ虎「ナンダ其機ナ弱い氣で生るもんか最大丈夫だ
 ヲ毒「お前に會やア夫て宜何卒親分に依頼で敵を討て呉子へ遺憾な
 事にやア野郎の名が知れねへ虎「夫りや己が皆な聞たヨ強性して聞

子へヨ斯々斯云譯だ那奴は音に響いと鱧魚だせ斯して居ちやア仕方
 が無何でもして夜の明ねへ内親分の所へ往て泣着う毒「己やア迎も
 往れねへ爰で轉々死やア惡の報で仕方がねへがアノ野郎が恨めしい
 ア、口惜い何卒敵を討て呉れ是が死別だト言たる儘兩眼活と見開き
 て拳を握り煩悶し又生べくもあらされハ有繋の毒婦も眞情ふ遍りて
 涙の聲震らせ虎「何しても生ねへかナア情ねへナイ毒さん何卒堪忍
 して呉ねへヨ己が寔に惡かつた其替り急度親分に憑で敵を討から此
 様な事あら止ア宜つた夫でも何か助からねへかどケットウに包きて
 介抱すれど倍呼吸逼り來て終に果なく息絶けり虎魚ハ今更悲歎に異
 れ未だ三十も四ツ五ツ壯の年を一期として死のまゝす雨粟かゝる
 機邊の木下闇に死耻肆す身の果の闇から闇に死出の山迷ひ行らん哀
 れさよト前後不覺に歎けしが急度心を勵まして終是因果の寄合だ最
 新成ちやア詮方がねへ外に追福作善の爲機もねへから遺言通りに観

機 観

分に憑んで敵を討て賞をう新して置も情ねへハテ何仕たら宜らうか
 ト思案最中向ふより花街戻りの空車思ひ切どの死との事か死サ止ま
 い此苦勞ト都々逸唱ふて來應るを虎魚ハ忽地一計を設ふけ虎「モシ
 く車屋さん車ア、悔りしと突然に虎「寔に後生ハ憑むが在ます此
 先の鯖子村まで往て下さいな車「私ア最腹が空て往れやせん虎「何
 喰物の有ますヨ寔に困るんだから何卒後生に直ハ高くても宜から
 車「お前さん車が有るぢやアねへか虎「實は子妾しの亭主ですが子妾
 を送つて親類の處へ往積りで來た處ろが急病で此様に成つたんでス
 ヨ車「御前さん所でも車屋かチャ一死爲つたの氣味の悪るい虎「斯
 して置ちやア面倒だから同商賣の親睦に病人の積りで車と置去でも
 宜かろ何卒載て下さいナ最二里程だが斯言ふ場合だから壹圓上るか
 ら車「夫りやお氣の毒ナ往もしませうが最今に三時だらう歸リア夜
 が明トス最壹圓お呉子へ何も功德た往やすから虎「夫じやア仕方が

機 観

ねへ夫で宜らる一是をる上りと大福餅を車夫に與へ包を己か車よ
 り取出し毒藏の死骸をケントウに包みて車に載せ己も侶にうち乗て
 鯖子村なる博徒の頭鮫鮫灘右衛門が一の子分雙鬚丁吉の家に到り
 一伍一什を物語り遺言の趣を憑みければ其趣親分鮫鮫に告るに放蕩
 者との言ながら正しく甥の事なれば忽地に承諾して先毒藏が骸を竊
 かみ埋葬復讐の喧嘩を仕掛鮫魚武松を討取んと子分に觸を廻まける
 抑此網鮫灘右衛門は近國に隠なき博徒の頭小して子分隊下の暴乱者
 多く就中名を得し子分ハ雙鬚丁吉劍鯨角二虎頭鯨介齒郎鯨鯨番
 作黄鯨建造酒龍鯨鯨松等を始として數十人の暴乱者集合ければ鯨魚
 寺の境内なる相撲場に押掛んと其準備頗なり偕又鮫魚武松は鯛子を
 伴ひて鮫清吾が別荘に到り件云々と物語れば清吾も太く驚愕て且鯛
 子が恙なきを悦び厚く勸りて舍藏置此件表立ては双方に疵着きて宜
 からず何分穩便に計ふべしト早速方頭魚方に至りけるに彼方にも大

海鯉方より鯛子逐電の趣報知ありて驚愕く事大方ならず兩家より諸
 方へ人を馳て探偵最中なり鱸方頭魚種々協議の上龜野公爵の龍宮第
 一の權者にて老功の仁者なれば此人に據て万事扱を依頼せば双方共
 一安穩なるべしと兩人等しく館に到り一向に懇と聞へ清吾は一先海
 鱸方へ歸りぬるが爰に海鯉社抱の鷲頭に洲走吉造と言者速しく馳來
 り放蕩者虎河豚昨夜鱸魚關に投殺され其遺言ふて毒婦虎魚鱸子村鱸
 鮫親分を懇とけるに素より甥の事なれば復讐の喧嘩をせんと子分隊
 下を大勢集め章魚寺の相撲場に押蒐んどの結構なり又鱸魚方にも速
 く此事聞へければ角力一統加勢して公園地の境内にて勝負すべしと
 今其準備最中なりと息突あへず注進すれば海鯉鱸は大ひに驚愕き是
 は由々敷大事あり如何ハ爲んと狼狽せしが鱸ハ急度心着き兎角中裁
 を入て穩便を計ふより手術なし當時龍城府内火消黨の大頭取鱸松魚
 郎ハ比類なき面利なれば是を懇とて中裁を扱はせんと清吾は洲走を

伴ふて車を飛して松魚郎が家に到り云々の趣を物語り中裁を懇とけ
 るに素より義小勇める俠客の夫と見掛て懇まされては五分でも引かぬ
 勇氣に水火の中をも物ともせず一議にも及ばず承諾して綱毘後押に
 て空を飛ばせ章魚寺の境内に至りて見れば早愕鮫方には數十人の子
 分を隨へ各長脇差を腰に佩び或は竹槍を搔搦み隊伍を備へし中央に
 は鱸鮫灘右衛門向鉢着手甲脚半に身を堅め赤銅作りの大脇差を具一
 文字に横へて黄八丈の大胴服の裾を褒りて膝小腰掛鬼をも欺く面魂
 小堂々として扣へたり角力方には一様に裸体小花勢なる蔽膝を結び
 上に各太刀を佩び就中にも鱸魚武松は白縮緬の鉢巻に黒天鵝絨小金
 銀にて立波鱸を高縫せし蔽膝に横繩七五三結て朱鞘金作の太刀を佩
 ひ手頃の生櫛を根抜にして葉付の儘小携へて其身喧嘩の敵手なれば
 直先に進出威風四丁を拂ひつ、凜然として扣へたり山の上にて府内
 の老少夫喧嘩よ懲討よと彌が上に重なりて其雜沓言計なし其時鱸松

魚郎は只一人紺織小袖を四五枚着し七分三分に裾折塞け堅筋の革羽織を紐永々と結び下げ双方の中央に馳入大手を張げ二玉立に卓附て大音に姓名を名乗り双方への會釋扱言語少々に理を盡せば有聲音に聞えし松魚郎が五分でも透ぬ扱に双方一言の不の字を言はず忽地和解に及びければ都て松魚郎が預となり親睦の拍手として海齋家より金銀を惜まらず蛤街の聚氣樓にて大宴會を催しければ諸事故障なく落着けり儲龜野公爵は双方の事情を取糺されしに全く虎魚毒藏等が痴情より出たる奸計なれども元來鯛子が婚姻の遲滞せしより件起れり素より大海鮭侯爵の志は太ひに戻れり且毒藏等罪あれども松魚郎が扱に因て双方穩便に治りま上の再回之を糺す時は由々敷騒動も及ぶべ死か依て毒藏大病につき伯父鰐鮫之を看護し万一病死に及びなば宜しく葬り遣すべし病中の手當諸入費は鯛武松より助勢すべし又車屋海老藏は虎魚を不熟離縁すべし最初虎魚を媒妁せしは醫師

鳥賊野甲庵なれば海老藏老て子なきを以て甲庵が娘やりにかを養ひ之を子として然るべし親子相當の手當等は大海鮭方より遣すべし虎魚は向後志を改め章魚寺天蓋僧正の弟子とあり剃髮染衣の身となりて万一毒藏亡命たらは追福作善を誓むべし鯛子の章魚藥師境内へ庵室一ヶ所取設け之に虎魚を住はせて藥師如來を守りまへし鯛子は素より大海鮭家に賞請たる養女にて海齋三千尊と婚姻の契約豫て定まりあれば今回は龜野公爵が改めて媒妁し早速海齋家へ送るべし然れど表向の禮式は侯爵歸朝の上にて公に披露すべし先内祝言を調ふべしと殘る處なき扱に人々大ひに安堵して皆其命のまゝありなるが折能大海鮭侯爵も御用有て歸朝せられ此件を聞て且驚き且龜野公の計を深く感歎せられしが伊羅磨も此儘にて家に在ては宜しめらす豫て本人望もあれを今一回大日本へ三ヶ年留學すべしと願を立て滞なく聞届られ不日出帆せらるゝにつき海齋家よりは送別として學資若干を

贈られける幸ひ侯爵歸朝につき暇で吉日良辰を撰び三千尋鯛子が婚儀無滞調ひ千秋万歳の歡極りなく欣喜春を迎へける兒童君達次の眼鏡を御覽じろ

版權登錄

龍宮開化眼機關

(眼機關)
明治二十二年五月五日印刷
全 年五月六日出版

定價金十六錢

編輯人 東京府平民 小原正太郎

發行者 東京府士族 中川米作

印刷者 東京府平民 永井鏡之丞

發兌 漫遊會

小石川區 掃除町卅三番地寄留

同所



版權所有

○漫遊會新版書目

- 一漫遊獨案內全 梅亭金鷄著
小林清親畫 定價金三十錢
- 一歌俳百人傳全 菊酒舍東籬著
小林清親畫 定價金二十錢
- 一滑茶人氣質全 鷺亭金升著
小林清親畫 定價金二十錢
- 一警俳人取寫真全 真木痴囊著
小林清親畫 定價金十八錢
- 一東京紙取寫真全 真木痴囊著
小林清親畫 定價金十八錢
- 一馬鹿獅子論全 梅亭金鷄著
小林清親畫 定價金十六錢
- 一滑稽一笑人全 鷺亭金升著
小林清親畫 定價金十六錢
- 一猿犬奇談全 真木痴囊著
小林清親畫 定價金十六錢

- 一近世日本蒙求全 菊酒舍東籬編
小林清親畫 定價金十六錢
- 一龍宮觀機關全 菊酒舍東籬著
小林清親畫 定價金十六錢
- 一志士龐月夜全 真木痴囊著
小林清親畫 定價金十五錢
- 一滑稽乘合船全 鷺亭金升著
小林清親畫 定價金十五錢
- 一歐洲夢廼曉全 菊酒舍東籬著
小林清親畫 定價金十五錢
- 一即席演說振全 梅亭金鷄著
小林清親畫 定價金十錢
- 一大祭日休暇由來全 梅亭金鷄編
小林清親畫 定價金八錢

京橋區大銀町

共和書房

日本橋區
本石町貳丁目

覺張榮三郎

淺草區三好町

大川錠吉

日本橋區
馬喰町二丁目

荒川藤兵衛

日本橋區人形町
通松島

森仙吉

同區通四丁目

金櫻堂

發賣書房

